

れを、これも大皿に積んで、搬んで来る。そして蜂の巢のやうに穴のあいたチーズを、オランダチーズだから、是非召上れと勧める。お客は、好みのパンにバターを塗り、自分の皿に選び取ったソーセイジやチーズを載せて、これをナイフで小さく切つて食べる。濃厚な味で、體中に急に脂が殖えたやうにも感じられる、頬が重くなつたやうでもある。ルーベンスやレンブラントの描いた肥えた顔に、自分も似てきたやうでもある。

アムステルダム町には、百四十四の運河が、縦横に貫通してゐる。その運河の水は、どろりと濁つてゐる。そして町中は、その水の匂ひで、どぶ臭い。一體この町は、他の多くのオランダの町と同様海面よりも低いので、埋土をして漸く築き上げられた町だ。だから「世界は神様がお作りになつたが、オランダはオランダ人が作つたのだ」とオランダ人は威張るとかいふ。

町の名所として案内されたものゝ中に、アムステルダム第一の狭い露地といふのがあつた。その幅は、レンブレントのあの「商業管理官」の冠つてゐる帽子一つを落せば、塞りさうである。「廣場」を誇とする歐洲大陸で、これはまた、小さい國、小さい町には、さてさてそれ相應の自慢があるものだと思つた。それからまた、驚くほど狭い家がある。これはトリップとい

ふ富豪とその馭者とが一寸口論した揚句に、馭者は、「旦那はなんでもおもちだ。わつしはなにもありません。旦那の御玄関の扉の幅だけの家があれば、わつしだつて文句はありません」といつた。「お安いことさ」と富豪が建てゝくれたのがこの狭い家だ。富豪の玄関も昔のまゝであつたが、昨日今日はどうなつてゐることか。

狭い町だが、夜の踊場は軒並みにある。若い男女が列を作つて、それぞれ望みの踊場に這入つてゆく。入口には、レースのカーテンが降りてゐる。軒毎にドアメンが立つてゐて、出入の客に、戸を開けてやる。かへりのお客は、小錢をドアメンの掌中に握らせる。ドアメンは感覺で錢高が分るらしく、改めもせず、ズボンのポケットに落してやる。とたんに、お錢とお錢の觸れあふ音。人通りの少くなつた往來を隔てゝ、向ひ側のドアメンが歌を歌ふと、こちら側のドアメンが、それに合せて、手振、足振、をかしく踊る。ズボンの中では、お錢がちやらりちやらり。

自轉車の多いことも、アムステルダム訪問者の眼を惹く。若い男女が手をつなぎながら、片手でハンドルを握り、馳けてゆく。相乗りをしてゐる夫婦の自轉車の前方には、籠がついてゐ

る。中で赤坊がすやすやと眠つてゐる。運河の岸邊に坐つて釣をしてゐる老若男女の背後の土堤には、乗りすてられた自転車がずらり。

道路も狭く、一番高いスカイスクレーパーも十二階だといふアムステルダムに、桁外れに大きなものは、なんといつても、レンブラントの繪であらう。レンブラントが人間の感情を光と影の裡に表現せんとした努力は、當時の人達には理解されず、只社會の嗤笑が、これに酬いるものであつたことを、ヴァン・ルーンはその著書の中に嘆いてゐる。得意時代もなくてはなかつたが、しかし愛妻と死別し、四人の子供と死別し、社會の嘲笑のうちに、窮乏と戦ひながら、おのれの信ずる畫道へ精進して、遂にこのアムステルダムで死んで行つたレンブラントの生涯は、ヨブを聯想させるものであるが、今日オランダ人はおのれの傑作アムステルダムを、敵の砲弾に曝しても、レンブラントの作は、祕密の場所にかくまつたといふ。レンブラントも亦、地下に瞑すべきである。

アムステルダムがもつてゐる小さくて大きなものは、ダイヤモンドである。ダイヤモンドの九割はイギリスの産だといふが、玉磨かざれば光なしで、そのダイヤモンドの研磨仕上げをす

るのは、このアムステルダムとアントワープである。世界最大のダイヤモンド「カリナン」を研磨したのは、アムステルダムのアッシュェル會社であつた。世界の景氣はまづ、アムステルダムのダイヤモンド研磨仕上げ會社に反映するものだともいへる。今日はそのダイヤモンドは、スリツケースに入れられて、腕利きの職工もろともに、ドーヴァーを渡つて、イギリスに移管されたといふ。

アムステルダムからヘーグに着くと、こゝは靜かでのんびりとした別天地であつた。ヘーグとは英語で、「垣根」の意であるが、オランダ語では、この都は、「伯爵の垣根」GRAVENHAGEと略されずに呼ばれてゐる。昔ウイリヤム伯が、狩の小舎を建て、垣をめぐらした。それから由來した名前である。「垣」を都の名としてゐる代りに、王宮には、垣は省いたといふのか、私の眼には、王宮を守る垣が見當らないので、王宮らしくなく感じられた。一體ヘーグの建物は外觀は豪華なものがなく、質素である。王宮も亦、これらの質素な普通の民家と軒を並べて

建てられてゐる。こゝでは運河の代りに、市の南北に連る深い森が、町に趣きを添へてゐる。

ウイルヘルミナ女皇の聰明におはすこと、國政に熱心でおはすことは、K公使から、このヘーグで聞かされたのだつた。ある時K公使に向つて、女皇が仰せられたことがある。それは、國民に不平があると、國は亂れる。生活の安定がなくなると、どうしても人間は不平を抱くものだ。だから私は、國民生活の安定といふことに意を注ぎます。それには、國營事業を起して、彼等に職を與へるのです、といふやうなことである。かうした話を聞いてゐると、K公使の居間から、日本からの放送が聞えてきた。それは愛國行進曲であつた。世界中に、距離がなくなつてしまつたことを、私は痛感したのだつた。

町を散歩すると、みずみずしいオランダや葡萄、新鮮な野菜などが、ドイツに暫く滞在してゐた自分の眼を惹く。農業の國、地味豊かな國にきたことを想ふのであつた。葉巻煙草がばかに安いことにも眼を奪はれる。當時の爲替相場場で換算して、一本三錢のがある。熱帯地方に、殖民地をもつ國に來たのだわいと思ふ。そここゝに、屋臺店が出張してゐる。一寸日本のおでん屋のやうでもある。そこで生鮮の酢漬を、お客が立ち喰ひしてゐる。自轉車に乗つたま

ま、店頭で、餅を嚼りながら、往來を眺めてゐる男もある。漁業の盛んな國、餅を常食とする國に這入つてきたことを、印象づけられるのだつた。

ふとある小料理屋に這入つて、夕食を攝つた。臺所が食堂から見える。蓄音機の音楽に合せ、白い帽子を冠つたクックが、庖丁の手を動かしてゐる。小さい食堂には、青年のお客が一人ゐた。そして料理屋のおかみさんと議論をしてゐる。戦争が起るだらうか、起らぬだらうかを議論しあつてゐるのである。「ドイツはチェコを取るだらう。取ればイギリスが黙してはゐない。イギリスが立てば、フランスは味方として立つだらう。結局他の諸國も聯合して、ドイツに當るだらう。ドイツはイタリヤとロシヤと提携して、聯合軍に當るだらう。又大戦争が起るよ」と青年がいへば、おかみさんは、「いやいやヒトラアは共產黨主義國家なんかと手を握るもんか。彼は獨軍と聯合軍との人數の差をよく知つてゐるのだから、戦争などを始めるもんですか」と青年の食卓を叩いて、熱辯を振つてゐる。「貴女は戦争否定論者かね」と私が聲をかけると、彼女は私のテーブルにやつて來て、再び持論を繰返して、最後に、づどんとテーブルを叩いた。ナイフやホークがびくりと動いた。

このヘーグは、スピノザが晩年住んだところである。彼も亦レンブラントと同じ時代に生れた。そして彼の思想も、時代に容れられなかつたのだ。彼は迫害を受けつゝも自己の學者的信念をまげることなく、自己の學說を守りつづけ、主張しつづけて、死んで行つたのである。

このヘーグには、例の平和宮がある。「平和」といふものを、しつかりと、永久に、この地上に建てようといふ人間願の具體化が、この平和宮であつたのだ。そして平和的に國際紛争を解決する趣旨の機構である國際仲裁裁判所と國際司法裁判所とが、こゝに根じろしてゐるのである。

平和宮内の法廷の間は樺作りである。廣くて、天井が高い。室の中央に擴聲器が置いてある。床には、水色地に、赤、白、緑の色で、花模様を織つたカーペットが敷かれてゐる。白レースの飾りのついた黒い法服を着た判事の坐る場所は、一段と高く、椅子は皮張りである。其處に坐つた安達さんや、織田さんや、舊友ハドソン君などの顔が、浮んでくる。裁判長のテーブルには、緑色の卓掛けがかゝつてゐた。普通の教場といふものに、威嚴をもたせると、この法廷になるんではないかとも考へた。國際法學院の年々の講義も、この法廷内で開かれるのだ

とさぶ。

この平和宮はカーネギー財團の寄附で第一次世界大戦直前に完成したのだが、それに世界各國が、建物のある部分又は得意の工藝美術品などを寄贈してゐる。そしてそれらのうちに、世界平和建設への列國の協力を表徴せんとしてゐるのである。日本からの寄贈品は、春の園を織り出した西陣の大壁掛である。誠に立派だが、惜しいことに、氣候や歳月の關係か、色が稍褪せて來た。ドイツは鐵の門を寄贈してゐる。第一次大戦當時、オランダの學生が、ふざけてこの門に、「貸門」と大きな札をぶらさげたとかいふ。とにかく、平和宮を力を入れて飾つておきながら、歐羅巴は、これで二度も大戦争をしなければならぬのである。しかも過去の大戦の時は戦禍を免れたオランダが、今日はこの平和宮のあるヘーグまでが敵襲を受けたのである。この平和宮が現實の永久平和の表徴となるのは、果していつのことであらう。

九月十九日、汽車でベルギーの國境を這入ると、背廣に山高帽、黄、黒、赤の縞模様のリボ

ンの腕章をつけた二人の男と、濃い鶯色の服に、同色の帽子を冠つた兵隊が、パスポートを調べにきた。戦争といふことを、ふと思つた。川縁の野原で、兵隊さんが教練をしてゐる。若い娘と子供が、それを見物してゐる。

オランダからベルギーに這入つてゆくと、まづ坂が眼につく。そしてカトリックの坊さんや尼さんの姿の多いのにも驚く。新教の國から舊教の國に、いつか來たのである。ゴチック式の教會が、そここゝに聳えて、アヴェ・マリアの鐘の音が、一齊に鳴り響く。

停車場で、運轉手に、ホテル・メトロポールへゆけといふと、あそこは宿賃が高いからいけない、私が、よいところへ案内してあげるといつて、ホテル・ロイヤルといふ便利な場所にある、しかし汚ないホテルに連れて行つた。早速窓から首を出すと、前の廣場に大勢の人間が蟬集してゐる。なにかと見つめてゐると、新聞自動車は今着いたところであるのだ。自動車の扉が開いて、山のやうに積まれた夕刊が、みるみるうちに、人々に奪はれてゆく。廣場に立つたまま、その新聞を読む男もゐる。カフェーに持ち込んで、急いで讀んでゐるのも見える。小脇に抱へたまま、家路を辿るらしいのもある。いづれも皆、戦争を懸念してゐるのである。

ブラッセルの文化を語る建物は、市廳であり、聖ガードル教會であらう。しかしそれらのものは、歐洲の到るところに、類似のものを見ることが出来る。世界のどこにも見られないものは、例のマニキン・ピッス、放尿坊の像である。それは子供の立小便をしてゐる姿である。一見しては三尺位の小さな、みすばらしい青銅の坊やの、お行儀の悪い姿だ。しかし見てゐるうちに、その無邪氣なお行儀の悪いことを知らない、童心が、青銅の顔に現れてくる。腰部が痒くてたまらなうな氣持も、躍如としてゐる。又よろよろとする子供の弱さが、腰のあたりに見られる。一六一九年に作られたのだといふが、今でも、この像の前には、見物人が絶えなない。それは、昔イギリスの軍勢に、奪取されたこともある。フランス人に盗られたこともある。又曲者に隠されてしまつたこともある。

ブラッセルの町のおやぢさんやおかみさんたちは、「なにせ、この町のふる顔でさね」と、放尿坊やを大いにもちあげる。しかしそれだけでは、放尿坊やに由緒がないと仰つしやるお方に

は、この放尿坊やお家柄をお教へしませう。嘘か本當か、それは知りません。人の言ふには、昔ブラツセルのお大名が、戦さ半ばで死んで行つた。そこで家臣達は、搖籃の中に眠つてゐたお大名の嗣子を、守りたてゝ、戦さをつゞけた。ある時、士氣を鼓舞するために、若殿を出陣させることになつたが、勿論幼兒の若殿様である。戰場には立たされない。そこで若殿様の寝てゐる搖籃を柳の枝にぶら下げた。若殿様はどう遊ばされたかと、忠臣が、搖籃の方を仰ぐと、こはいかに、若殿様には、御放尿中であつた。「殿様御放尿」と忠臣は叫んだ。味方の兵ども、笑つたわ、一度にわつと笑つた。それで急に元氣づいて、兵どもは大いに戦ひ大いに勝つたといふ。そのお殿様、後にゴドフロワ三世といつたお方のお姿を石に彫つたのが、このマニキン・ピッス。今日のお殿様に彫りかへられたのが、今から約三百年前。チャールズ五世はこの坊やに、お祭着を贈つた。一八三〇年には、坊やは、革命黨のブラウズを着てゐた。今日では、東京朝日新聞社から贈つた陣羽織を着ることもあるといふ。時に應じて、いろいろな服装をする坊やだ。「マネキン」の名が、こゝから起つたものなら、しやなりしやなりと姿態を作つて、巴里の流行服をお客の前に紹介するあの「マネキン」とは大きな異ひだ。「マネキン」はフラマン

語で少年といふ意味だといふ。

世界の眼は、今日ベルギーに注がれてゐる。そしてどれだけの人が、あの坊やの姿を、想ひ出してゐることか。(昭十五・七)

## 古戦場ウオタルー

一九三八年の末、ロンドンからサザンプトンへの汽車の中で、私は、南米某國の駐英公使と、ヒトラア總統のジウ追放政策を論じた。彼は言つた。「人間は偉くなると、周圍の人間が、デミ・ゴットとして崇め祭つてしまふんでね。失敗をしでかすのも、つい、そんな時さ。ヒトラアもやり過ぎ、ナポレオンもやり過ぎ！」

そのナポレオンのやり過ぎの跡は、ウオタルーの古戦場で、私も矢張、一九三八年の秋こゝを訪づれる機会をもつたのであつた。

ウオタルーに着くと、まづパノラマに案内された。このパノラマが設備されたのは一九二二年で、畫は、フランス海軍附屬畫家レイ・デュムランの作だといふことであつた。「ウオタルーの戦」と題する映畫も見せて貰つてから、さて古戦場を一望の下に收めたといふ「ライオンが

丘」に登つた。この丘はピラミッド型で、二千呎の高さに築き上げたものである。その急傾斜の石壇を、秋風に吹き飛ばされまいと鐵の手摺を握りしめ、帽子を抑へながら、やつと頂上を極めると、ライオンが立つて吼えてゐる像がある。分捕つたフランスの大砲で鑄造したものだ。重量は二十八トンもあるといふ。

頂上に立つと、冷い大風が絶えず起つてゐる。大空には、低く、白雲が飛んでゐる。下瞰すれば、遙かに、東から西に連る緑の峰がある。聯合軍の第一線が根據地としたとこだといふ。浅い谷を隔て、フランス軍の根據地であつたといふ連峰が見える。ラ・エ・サントの百姓家が、白く見える。戸には、昔フランス軍に依つて穿たれた砲彈の跡が、今も残つてゐるといふことである。そしてこれらの連峰やこの百姓家を擁してゐるものは、平原である。其處には、荒い西風に靡く黄ばんだ草葉が、その昔、この野を埋めた軍馬の鬣の亂れる光景を偲ばしめる。

私は昔、ウオタルーの敗戦は、ナポレオンが睡魔に襲はれたためであるといふことを聞かされた。又彼の腹痛の激しかつた爲に、諸將を指揮するのが遅れたことによるとも聞かされた。それらは確かにお伽話的で面白い。しかし流石、ユゴーは、ローマンチックなことを言つて

なる。「一八一五年六月十七日の夜から十八日にかけての雨なかりせば、ヨーロッパの將來は異つてゐたであらう。」

日本でも、近松などは、ユゴーと同じ着想で、朝顔日記などに於いて、雨が人生に描く大きな波紋を寫し出してゐる。

六月十八日は夜來の豪雨が止まない。平原の此處彼處には沼池が穿たれて、砲車の轍が水中に没する。水かさは、實に軍馬の腹掛を没すのであつた。しかし幸ひなるかな、時は將にみのりの夏であつた。平原の此處彼處の畑には、夏小麦、ライ麦が豊かに實つてゐた。その畑の上を、めちやくちやに、ナポレオンは砲車を進め、七萬一千九百の軍勢を行進させ、軍馬を走らせたのである。雨が霽れて、陽が射して、大地が乾いて、砲車が自由自在に動き、軍馬が疾驅できる瞬間を待ち構へてゐるナポレオンだつた。さうしたら得意の砲を自ら發しようとするの鳴つてゐるナポレオンだつた。この日ナポレオン側の兵七萬一千九百人に對して、聯合軍側の軍勢は六萬七千人。ウエリントンの備へてゐる砲は百五十門、ナポレオンの備へたのは二百四十三門。砲術に於て天才であるばかりでなく、數に於ても將に勝利的であることをナポレオンは自

負してゐるのであつた。

もし大地が乾いてゐて、砲車が動かせたら、戦は午前六時から始つただらう。そして午後二時には、ナポレオンの電撃的勝利に歸したであらうとは、ユゴーの観測である。不幸にして反對の條件は、ナポレオンをして、最初の發砲を午前十一時卅五分に遅延させたのだつた。

しかも正午から四時までの間は、ウオタルの天地は闇に蔽はれてしまつた。芝居なら、だんまりといふところだ。その闇の中を、敵味方の軍勢の黒い服、赤い服、格子縞の外衣、白い長いゲートル、馬の赤毛の尾、赤銅の鞍が相觸れ、相亂れて交錯するのであつた。

闇が次第に霽れて行つて、戦況は明瞭となつた。それは、ウエリントン側に不利、ナポレオン側に有利であつた。四時には、馬上のウエリントンの姿は消えてなかつた。「早や御退却か！」ナポレオンはかう呟いて、朝から不機嫌に閉ざした唇を綻ばして、上機嫌であつた。

平原がウエリントンに奪はれたと見える瞬間もあり、ナポレオンの手に落ちたと見える瞬間



もあつて、戦はつゞき、時は経過し、敵も味方も兵馬は倒れ、疲弊して来るばかりであつた。その間にウエリントンの援軍がブリッヘルの指揮の下に到着したのだつた。その援軍の軍帽の列は、暗い森が動き出したやうにも見えたりう。ナポレオンは「マクベス」の敗北を示唆した現象、ダンシアヌの岡に愈々押し寄せて来たバーナムの森が現實にをのれの身に迫つて来たことを悟つたかも知れない。勝敗は残る一戦にあると、ナポレオンも考へた。それで、軍略にも特に意を配つたのであつた。グルシが援軍を率ゐてくるぞといふ流言なども、士氣を鼓舞せんがためのナポレオンの策であつたといふ。とにかくフランスの將兵は、刀の折れるまで戦つたのである。しかしそれにもかゝらず、フランス軍は全線に互つて撃破された。そしてフランス陸軍の花と稱された近衛隊が戦死してゆくとき、「皇帝萬歳！」と叫んだといふことである。その叫ぶ聲が峯から峯へ響くのが、生き残つた軍友達の耳底にはいつまでも消えなかつたことであらう。あの響はたしかにナポレオンの痛を、軍服の上から突いたに違ひない。あるひは、彼のこの遺傳病の發生を早めた原因となつたに違ひない。

ウオタルーの戦の止んだのは夜の八時過ぎ、一日中曇天だつたこの六月十八日であつたのに、

夜の八時には、急に空が晴れて、歐大陸の赤い赤い太陽が靜かに西に沈んでゆくところであつた。

私は、ライオンが丘の麓の映畫小舎で觀た、映畫中のナポレオンを想ひ出した。シーンは、彼の陣中で、朝食をとるところだ。武人らしく、文字通り武者ぶりついで食べてゐる。その際、「あの時もさうだつたんだらうな」と思つた。あの時といふのは、ある朝のナポレオンの食事を指すのだ。實はその朝食に、「支那」といふ文字が一寸關聯するので、時節柄、自然想ひ出されたものである。「支那」といふのは、實は、カフェーの名で「支那風呂」Bains Chinois とさふので、今日のリュ・ド・ラ・ペーに、當時建てられた豪華なカフェーで、極彩色木造の建物、屋根には龍が翼を擴げてゐるといふ趣向。ナポレオンの鷲のやうな眼光は、忽ちこの建物に注がれた。朝食は支那の雰圍氣の裡にと、ナポレオンは所望したのだつた。そして註文した料理は彼の一番に好きな羊のカツレツ、野菜オムレツ、それにシャンベルタンの葡萄酒、もし饅頭の緒を命じたなどいふのであつたら、それこそ、それはウオタルーの敗戦以上にニュース價値がわれわれ東洋人にはあるのだけれども、生憎と、カフェーの板前は生粹の巴里兒であつたと

いふことである。

ナポレオンの顔は映畫で見ても、自然に人なつこいところがあるが、ウエリントンの實顔にはまだ會つたこともないが、映畫で會つたところは頗る印象が悪い。「ウエリントンの偉さは最後まで頑張つたところにある。それはイギリス人の頑強な精神である。イギリス人の決斷である。イギリス人の裡に湧いてゐる血潮である。」とユゴーは稱揚してゐる。しかしウエリントン自身は、「それはブリッヘル（Prüffel）の率ゐる援軍が來たためだつた」と、何處までも謙讓な態度で述懐してゐる。

今年もウオタルーの記念日六月十八日を迎へた。しかもこの日、現代のナポレオンといはれるヒトラー總統に、フランスが降服して、世界を呆然たらしめたのだつた。何しろ無血で巴里を占領したのは、全くヒトラーの獨創によるものだ。魔法物語にも、無血占領といふ思想は未だ會てない。

私が矢張一九三八年ベルリンで、A教授と語つた時に、談たまたまソーセージに及んだ。教授はいつた。「大戰前は、獨逸も隆盛時代、われわれも夜通し踊つたものです。それで疲れると温かいソーセージを食べて元氣をつけたもんでね。いや、大戰後は、ポテトスープで身を温めといふところですか。しかし、實際、この頃のヒトラー總統の下には國民は踊る元氣なんかありませんね。何しろ、明日にも戦争がおつはじまるか知れないんですからね。そりや、巴里やロンドンが棚ぼた式に獨逸に轉げ込んでくれや、その時は別ですよ。」

ウオタルーのこの記念日に、わが友A教授の食卓には、久々に温かいソーセージが上つたことであらう。それから、南米の公使さんは、昨今、ヒトラーをどう考へてゐることであらうか。（昭和十五・八）

## 霧・罌粟の花・マック拓相

仰げば大空は霧に奪はれてしまつた。俯せば地上は霧で距離を失つてゐる。只はつきりと見えるものは、ウエストミンスター橋上に、霧から捨てられた自分の姿だけである。旅人のわが姿だけである。

ウヅワアスがこの橋の上から讚美した船・塔・ドーム・劇場・寺院の美観は、霧中に消えて空しい。只現實には咫尺する議事堂が、千里の涯を望遠鏡に映したやうにぼんやりと浮んでゐる。テームズ河岸に添ふて思ひのまゝに延びて見たといふ感じの九百四十呎ある、あの長い議事堂は、霧の影響か、いつもよりも短い。或は高さ或は低き小尖塔の列は、磨き上げた槍の鋒先きに似たいつもの鋭さがぐつと柔げられてゐる。左端貴族院の上に聳えるヴィクトリヤの角塔は、夢中の夢のやうに幽かだ。中央のセントラル・スパイヤも視線が長く觸れれば、崩れてし

まひさうに薄い。ペンの時塔はぼんやりと立上つて、時計の針は見えないが、霧も埋め残した時報は、はつきりと、お釋迦様の嘘のやうに、品のよさと落着きとを以て響いて来る。

ある霧の日、辻に立つた。見渡せば、軒を並べた商店が一軒毎に薄れてゆき、四五軒も數へてゐる中に家は盡き、町も盡きて、模糊たる幽界が無限に續いてしまつてゐる。うつ向いた通行人も近きは服の縮目も歴然としてゐるが、遠きはぼやけて、頭部から脚部に行くに従つてぼかされた姿は、人間味は無くなつて、霧の精に化けたやう。沙翁の妖女、ディケンスの幽霊などが聯想される。

この霧はこつそりと逃げてゆく。しかも一齊には逃げない。芝居の緞帳が上つてゆくやうな調子で、そろりそろり否のろりのろりと、一部分から霧れてゆく。霧に蔽はれた聖ジェームス公園の、ダリヤ園の一隅にだけ霧が霽れた瞬間だつた。白、赤、黄、薄紫の花の色彩が眩しく、ソロモンの前に女王の捧げた花束を聯想させた。何處も彼處も鈍い色調の中に、只この一點に集つた色の配合、それは観る者に盲人が兩眼の開いた瞬間の驚異を體驗させる。

ロンドンの趣は霧に依つて深い。その霧が年毎に薄れてゆき、昔ビイン・スーブと呼ばれたや

うな霧は、今は見當らなくなつたといふ。イギリスは慥かに國寶の一つを失ひかけてゐる。濃霧に蔽はれたやうな神秘性の漂ふイギリスの思想が、明晰な、しかし深みの缺けたフランスやアメリカの思想に近づきつゝある表徴で、それが無いことを心から祈る。

十一月十一日、歐洲大戰の休戦記念日が來た。六週間前には再度の歐洲戦争の勃發の危機に直面したロンドン兒は、例年よりも感慨深い記念日を迎へたらしい。その廿周年記念日に當つて、イギリス國民は、殊に青年層に對して、強い要望を懷いてゐた。それは彼等若き人達が、身を以て國難に當つた人々に感謝すると同時に、一旦緩急あらば彼等に背る誓の固きことであつた。それ程、戦争の危機は去りしに似て尙低迷してゐる歐洲の政情であつたのだ。

この日は罌粟日とも呼ばれ、街頭にも、料理店にも、ホテルにも、深紅の罌粟の花の造花賣りの婦人が活躍する。人々は皆これを購つて胸につける。價格一志のもあり、二志六片のもあり、様々である。兩陛下もこれを御買上げ遊ばされた。労働者の色の褪せた外套の上にも、新

しい罌粟の花がつかつやしい。罌粟を胸に赤兒が乳母車の中に眠つてゐる。

この罌粟の賣上高は、大戰による廢兵とその家族の救濟事業に用ひられる。廢兵も廿年後の今日既に老齡に達した者もあり、従つてその扶養費は増加して來たといふ。昨年の賣上高は五十五萬六千磅、今年はそれ以上でなければならぬと「ブリテイッシュ・リイジョン」の會長さんが高唱する。かうした記念日が只抽象的感謝に終らずして、國民協力の事業が效果的に具體化されてゆくところに、イギリス人の實踐性を見ることが出来る。何故ボビイを選定したのかとイギリスの外交官に訊ねたら、戦争で、人間も、人間の築き上げたものも消失してしまつた中に、罌粟の花だけは昔ながらの美しさで、野邊に咲き匂ふてゐたからであつたといふ。ある書物には、大戰の頃北部フランスのフランダースの野邊には罌粟が眞紅に燃えてゐた。それでこの花は「血の野邊」を回想させるものであるとあつた。

さて記念式は、無名戰士の記念碑の前で執行された。この石造記念碑は一九二〇年に建造され、「パアラメント・ストリート」の中央に聳えてゐる。

定刻二時間も前から、ホワイトホールの附近は人垣に埋れた。群衆の中に青年の多かつたこ

とが著しく眼についた。

樂の吹奏、それにつれて軍隊の行進、式が始つた。百日誓のやうな軍帽、白いヘルメット、赤い軍服等、菖蒲の節句の雛壇に飾つて見たいやうなイギリス軍人のいでたちは、小春日和の下に愈々きらびやかである。次に來たのは大戦に参加した古兵ふるつはひの一隊、今は階級もそれぞれ異り、服装もモーニング山高の姿あり、古軍服に身を固めたる姿もある。この時突如として起る拍手、衆目の注がれる點を仰げば、今丁度クインが、記念碑の脇の内務省の窓に現れ給ふたところなのである。黒の御服の胸に燃ゆるは、かの深紅の罌粟の花である。

チェンバレン首相を先頭に閣僚の列。静かな、敬虔な、而も確固たるチェンバレンの歩調、それは少年時代から *try, try, try, again* と云ふことを人生のモットとして遵奉して來た、彼の處生の歩調であるのだらうと見詰める。

最後に、海軍服の若き英國皇帝が、ケント侯を従へさせられ、歩を進められて、記念塔に向

つて擧手の禮を賜ひ、さて罌粟の花輪を捧げ給ふ。臣下としては、まづ第一にチェンバレン首相が罌粟の花輪を捧げる。次はマルコム・マクドナルド拓相で、その捧げる花輪は、大英帝國廿餘りの屬領に香るといふ様々の草花で編まれたものである。

ビッグ・ベンが定刻十一時を報じる。砲聲が轟き渡る。靜肅の二分間、默禱の二分間、砲聲の轟よりも、海浪の轟よりも、人間の創り出す靜肅の深さ、大きさ、強さ。

マクドナルド拓相はチェンバレンの老いたるに反して、未だ若年である。このマック君は約十年前京都に開かれた太平洋會議に出席したことがある。彼の人格の高さと頭腦の明晰さは、會議に於ても、衆人の敬愛の念を惹くのであつた。日本人からも好かれた彼であつたが、日本人をも好きな彼であつた。當時彼の私に寄せてくれた印象記の中に、日本の家に這入る前に靴を脱ぐ瞬間、浮世の塵を拂つて平和の家庭生活に入るといふ強い印象を受ける。日本婦人が無言で客を迎へる態度は、遠い旅行から歸つて來た舊知の友を迎へるやうな懇ろさが籠つて

ゐる。こんな歓迎は世界の何處にも見られるものではない。西洋人は、日本人は遠慮が過ぎて心底が知れぬと眩くが、私は益々日本人が好きになる、といふ文句があつた。

丁度議會開會中で、殊にパレスタイン問題で拓相マック君は多忙であつたにも拘らず、一日拓務省に、私をお茶に招いてくれた。ダウニング・ストリートに在る拓務省は、これが植民地に富を包蔵する大英帝國の拓務省かと見直す程、見すばらしい。荒い麻布の小包装がいくつも玄關に轉つてゐる。内容は植民地から發送された重要書類なのだらう。なんだかアラブ馬の足搔き起るパレスタインの塵が舞つてゐるやうな埃りつぽい感の玄關だ。

漸く通された大廣間、背廣服の年若きマック大臣が現れて來た。昔ながらのなりふりに構はない質朴な彼、微笑む瞬間の多かつた昔に比べて、考へてゐる瞬間の多くなつた彼は、齡以上に老けて見える。しかし又齡以上の威嚴も具つて來た。

彼はしきりに京都を戀しがつてゐた。又吉田大使の歸國されることを残念がつてもゐた。野に下つたら、日本に旅行に行きたい。自分が閑僚になつてから既に七年、毎日午前一時から六時までの休息時間を除いては、多忙に追はれてゐる。忙しくてたうとう結婚する暇もなくなつ

てしまつた、とマック君は微笑んだ。

「しかしパレスタイン問題では、私も白髪が生えましたね。」

「問題解決の好い方法を教へませうか。支那式に出るんですね。アラブに少し掴ますんですよ。」  
「いや、それより好い方法を私は考へてゐますがね、ヒトラア總統に、のしをつけて進呈するんですな、ジウの追放所にね。」

卓上に電話の鈴、マック君は受話器を取つたが、少しぢれつたさうに「仰有ることが分らない」といふ。先方は何か長々と話し出す。「イエス、イエス」と答へるマック君の聲が「よく分つた」といふ調子になつてゆき、「仰有る通りだ、ではゆつくり月曜日にお話しませう」と言つて電話を切つた。背廣の給仕が茶菓を搬んで來た。拓相は立上つて、濃いお茶か薄いのかと訊ねながら、自分で鹽梅してくれる。お菓子は三種類ばかりのビスケットだ。この時マック君の顔は、京都時代あの牛津大學卒業後間もない若い日の頃に立返つてゐた。その若やいだ顔を、そつくりそのまま、残して辭去する私に、今度は日本でね、と言つて、彼は丁寧に日本流の御辭儀をするのであつた。(昭和十四・四)

## ある午後、の英國議會

實利主義——「ランド・オヴ・ショップキーパーズ」といふ言葉に依つて表現されるパウンス、シリングス、ベンスへの打算的敏感さと、「マッドリング・スルー」なる言葉で表現さるゝ政治的現實性だけが、イギリス人の特徴ではない。傳統的儀式と言はうか、歴史の蟲干と言はうかそんなものに對する非實利主義的執着も、確に彼等の性格の一要因をなしてゐる。

例へば國會開院式當日には、一寸變つた行事が年々行はれる。十人の近衛兵を引具した下院警視吏が、院内にガイ・ファークスが忍んではゐぬかと、偵察して歩くのである。ガイ・ファークスは宗教的對立の激しかつた一六〇五年の開院式當日、カソリック教徒が、火薬を爆發させて、王様と議員の斃殺を計つた事件に、一役買つて出た男である。勿論現代の議院内に鼠の子一匹、蚤の子一匹捕へうるものがあるわけでない。それでも、偵察隊はチューダー期の扮装物

物しく、仔細な顔付きで隅々を根氣よく巡察する。見物する議員達は「無駄な事だ！」などとは考へないで、「矢張立派だわい」と感心する。尤もかういつた一見無益なお儀式も、共産黨員やファシスト黨員の陰謀が盛んな時代となれば、或はその「實用性」を回復するのも知れない。

下院議員の一人に、年中無休漢と自稱する、アレグザンダアといふ男がゐる。彼はマクドナルド内閣の海相であつた。ロンドン軍縮會議で、海相として各國の代表と折衝したのは彼であつた。又ヨセミテ太平洋會議に、英國代表の團長をつとめたのも彼であつた。今は労働黨の親分の一人、そのアレグザンダア君から、ある日、議院の食堂でお茶を一緒に飲みたいから來いとの招待状を受取つた。

十一月九日わが俵が議院の門に入らむとすると、黒ヘルメット、黒服、鼻の尖端の赤く凍えた門衛の巡查が、手を揚げて、門前の歩行者の一群を制し、さてわが俵に通れと合圖して、舉

手の禮の裡に、窓の中の、東洋から渡つて来た自分の顔を凝視した。

セントラル・ロビーに迎へに来てくれた、モーニング服のアレグザンダア君に導かれた議會食堂は、餘り大きくはないが、明るい感じの、暖い部屋だ。食堂で待つてゐたアレグザンダア夫人が、濃いお茶に牛乳を混ぜてくれる、好い香りだ。トーストも柔くて、それでゐてこんがり焼けた焦目の齒觸り快く、その何時までも冷めぬ温さに、秘されたる術を偲びつゝ呑み込めば、豊に塗られたバターが五臓に融けてゆく。流石イギリスは何處へ行つても、お茶とトーストがうまい。命じないのに、給仕はフレンチ・ペイストリイを搬んで来た。イギリス貴族院の議場のやうに、デコレーションがけばけばしいお菓子だ。外交上ばかりでなく、食卓の上でも、英佛の提携はなかなか固い。

「時に、國際聯盟を世界各國が支持しなければ、世界の平和は保障されない。それにしても、日本の評判は、今我々の間ではひどく悪いね。私には時間と金が無いから日本にはまだ行つたことがないが、これで日本人には相當友人があるんだ。これらの人達との友情は渝らないが、日本の對支政策に反對な私は、時々攻撃演説をやるもので、なんだか、貴下はじめ日本の友人

にはばつが悪くてねと」アレグザンダア君は、英國労働黨の議員らしい、そして人なつこい調子で話しかける。

此處彼處のテーブルに、議員達が友人とお茶を飲んでゐる。皆端然として、話聲も慎ましやかである。時々一同が目を注ぐのは、壁にある。此處には議場の辯士の姓名が、その都度細長い電氣表示器に發表されるからである。見上げると、「ロイド・ジョージ」の名が表示される。すると其處此處のテーブルから人々が立上る。私もアレグザンダアの示唆に従つて、この政界の古武士の演説を聴くべく一緒に立上つた。

議場入口の正面奥、天蓋付きの議長椅子に鎮座ましますのはウィッグを冠つた議長、如何にもお祭のだし人形のやうな感じだ。テーブルの上の新約聖書と議員の宣誓書をそれぞれ藏めた眞鍮で装釘された二つの箱が目を惹く。議長席の左右に、雑段のやうに五段、後方に向つて次第に高く配列された革張のベンチがある。其處に並んだお嬢様は白髪白髯の高砂のおぢいさん



連。左右ギャラリーの二段のベンチは、殆どが空きだ。なるほどこの空席ぶりでは、議員總数が六百十五名なのに、四百五十名の議席しか備へなかつたのは、建築技師の過ちの功名にあらずして、過たざる功名である。

細長い議場は華麗さはなく、質實堅牢な仕事場といふ第一印象を與へる。すべて樫造り、色調も豊かな樫の一角。そのうちやゝ色の濃い部分は、格天井の彫刻とギャラリーの正面に彫り上げた歴代皇帝の御紋章。それらはちらりと見ては簡素そのものであるが、凝視してゐるうちに繊細な技巧と構想とが歴然として來る。

色彩の單調に倦んだ眼を左右のギャラリーの窓に轉ずれば、此處はステインドグラスの色調が美しい、格天井の合間一つ一つから間接照明の電氣の穩かな光、しかし、これは昔の眞鍮造りの豪華なシャンデリヤから、瓦斯のほの青い光が議場を照らしてゐたのに比べては、近代化されすぎて、無味無刺戟の嫌ひがある。

議長の前、フロント・ベンチの前に立つてゐる白髪のロイド・ジョージの風貌は一寸我が土方學先生を偲ばせるものがある。音聲は壯重且明晰、ジュスチアの技巧なく、その抑揚節奏

に聽入れば、あたかも溪流の岩に砕け、小石を轉じ、大河となつて大海に走驅する概がある。流石は百鍊のパーラメンタリアンだ。

チュンパレン外交は獨裁國に對する屈服である。ヒトラアが「お前達イギリス人とはミニヒで平和を結んだではないか」といつた言葉は、「貴様等は俺の掌中にあるんだぞ」といふ謂だ。一般的プランに基かないかうした獨裁者に對する具體的な讓歩は、いくらやつても、結局何ら世界平和に貢獻しない。又何故ミニヒ協定でロシアを無視したか。それはヒトラアの要求に屈したためではないか。ロシアは何といつても大國だ。ヒトラアの率ゐる國民はたつた八千萬であるに對し、ロシアの人口は一億八千萬ではないか。二百五十萬の常備兵と一千三百萬の豫備兵をもつロシアの陸軍は世界一である。ロシアのこの軍擴が止まぬうちは、ヒトラアも軍縮に手を染めることはできない。平和は軍縮なしには到來しないのだ。そしてこの大きな軍備をもつロシアを無視して、世界平和への途が開けると思ふのか。

ロシアとの協力を拒んだミュニヒの政策が、平和への途ではないと均しく、支那問題の解決なくして、軍縮が行はれると思ふのか？ 政府は、チェコスロヴァキヤ問題に就いて採つたと同じ政策を、この支那問題に就いても、繰返さうといふのか？ スペインをも獨裁政治家に譲らうといふのか？

チェンバレンのアピールズメント政策に対する彼ロイド・ジョージのこの痛烈な批判が、政府反対黨から喜ばれたのは當然である。そして政府黨からこれに對する反撃のあつたことも、亦當然であつた。彼は、日本からの訪問者が聴衆の一人であることには、氣付かなかつた。然し東亞の問題が取り上げられる毎に、政府黨のベンチに坐つた舊知のアスタア君は、いつもニヤニヤとして私の方に眼を向けるのであつた。

彼の演説中、或は笑が、或は男女入交つた「ヒヤ／＼」の歡聲が、七十五呎の奥行、四十五呎の間口、四十一呎の高さの議場に湧き上るのであつた。彼の演説を一心に鉛筆で紙に書き止めてゐる議員もゐる。又腕組みのまま傾聴してゐる者、フロント・ベンチに腰をかけて、兩脚を長々と床の上に突き出して、眠つたやうな姿勢で聽いてゐる者、兩腕をベンチの背にもたせ

て眼鏡越しにロイド・ジョージを睥睨してゐる者など、様々の姿態が見られる。新聞記者達は一様に無表情だが、緊張してゐる。超満員の婦人席ギャラリーは、黒い帽子のセールとでも譬へやうか。

流石はロイド・ジョージの演説とあつて、屢々發せられるといはれる聲も聞かれず、野次も飛ばない。咳拂と、風呂敷のやうな白麻のハンカチの折目の正しいのでちゃんと鼻をかむ音と頻繁に議員達の出入する姿で議場は時折ざわつくが、もしこれらの音と動きとが無かつたなら、イギリスの議會は、修道院の默想會に譬へられよう。

ロイド・ジョージの演説が終ると、退席する議員と傍聴者が廊下に列を作つた。その列を見ながら、アレグザンダー君の紹介してくれた一議員が私にいつた。

「夜遅くなると、この廊下は森閑とします。議場から退出する議員に、戸番が『どなた様のお歸り？』と叫びましてね。するとこの建物中の警備巡查が異口同音に、『どなた様のお歸り？』」

と真似るんです。

昔ロンドンの町は、夜は浮浪人がうろついて物騒でした。それで通行人を保護するための誰何標語が「どなた様のお歸り？」なんです。今の時世にこんなことをとお思ひでせうが、議員にとつては、この言葉は確に有難い、ホツとさせられるのですね。長時間議院で働かされて疲れ切つて出て来る議員達は、この懐しい言葉に、気分が轉換されるのですよ。」

院外は霧の夕暮であつた。顧みて仰げばぼんやりと滲んだ光、それは議會の時塔、二百五十呎の高さに點つてゐる燈火である。議員の尊嚴を傷つけた議員を幽閉する牢獄であるこの時塔、しかも一八八〇年以來その牢獄の門は下ろされたまま抜かれてゐないといふイギリスの議會史の一頁を飾るこの時塔の外廓は霧に消されて、たゞ「此處だぞ、此處だぞ」と叫ぶチャイムだけが聞えて来る。

暴風雨は歐洲の天地に吹き荒んでゐる。デモクラシーの古典的、世界的表徴であるイギリス議會の將來や如何。さうした疑問が、霧の中を宿に向つて歩を焦慮る東洋からの學徒の頭の中に浮び上つて来るのであつた。(昭和十四・五)

### ウエストミンスター・アベール

二つの高い角塔の中央に、低い三角塔がちよこりと擡頭した小ぢんまりとした入口、薄霧に包まれても、雨に打たれても、陽に焼かれても、いつも沈黙の裡にその美しさを崩さないこの入口、それは十八世紀頃、心身の修練のためにヨーロッパ大陸の大都市巡遊に出掛けたイギリスの貴公子達が、屢々夢の中で潜つたといはれる入口であつて、即ち、ウエストミンスター・アベールの西側入口なのである。

エドワード四世は「苟しくもイギリス人の血の通つてゐる者は、いづれも皆ウエストミンスター・アベールを敬慕する」と力を籠めて法王に書き送つたといふ。全くイギリス人は「アベール」を自分の本當の家だと心得てゐるらしく見える。「アベール」の歴史は、イギリス國民の歴史であり、我家の歴史であると、彼等は考へてゐるらしい。

「アペー」の歴史は長い。それは傳説と史實とが相交錯する紀元六世紀、イギリスが、サクソン王の支配下に在る頃にまで遡るのである。多くの物語はさゝやかな發端から面白く發展してゆく。この物語や亦しかりである。話はローマの都から始まる。或る日法王はローマの市場で曝物にされてゐたアングロサクソンの子供達に目をつけた。そしてそれが、いづれも紅顔の美少年であつたことを、法王は忘れなかつた。この端麗金髪のアングロサクソン民族に、キリスト教を布教する興味が、法王の胸に湧き上つたのであつた。さてこのキリスト教の影響を受けた改宗者の一人に、イースト・サクソン王セバアトがあつた。彼はおのれの信仰心の發露として、紀元六〇五年、テムズ河の邊りウエスト・ロンドンに寺院を建立した。そしてこの寺院をウエスト・ミンスタ、即ち西院と命名した。それが、今日の行政区劃としてのウエストミンスタに在る「アペー」の起源であるとされる。しかもこの建物は、聖ペテロが天降つて、親ら祝福したもので、その瞬間、堂内は煌々と輝き渡り、天上の樂の音が流れ、聖香が漂ふたと傳へられる。

一〇四二年に即位したエドワド懺悔王は、父王の死後、デンマーク人から國外に追はれた。歸志抑へ難き王は、もし無事に歸國ができたなら、ローマのペテロ寺院に詣うますと、祈

願をこめるのであつた。その後彼は無事に歸國ができたが、國務に忙しいためローマへ參詣の暇がない。法王は、誓言實行に代へて、ペテロに奉獻した寺院を建立するやうに命じた。そこでエドワド王は、聖ペテロに因縁の深いあの「アペー」を、大規模に復興増築することに決したのである。その建築には、十五ヶ年を費した。かくして寺院の建築様式はエドワドに依り、サクソン式が廢されて、ノルマン式が採用されるに至つた。その後一二四五年に至つて、ヘンリ三世は、莫大な建築費を投じて、今日我々の仰ぎ見るフランス式影響のかなり濃厚な宏壯豪華な「アペー」を作り上げた。その後五世紀に互り、歴代の王様に依つて、逐次完成されたのである。あの簡素美を特徴とする西側入口は、十八世紀に竣工されたものである。

ウエストミンスタ・アペーのもつ歴史的價值は、創設者たるエドワド懺悔王の人格に依つて決定されたものともいへるであらう。エドワド王は高徳の士であつた。だから群臣は悉く王を敬慕してゐた。國民の王を追慕する念は、王の死後愈々深まつて行つた。それには理由が

あつた。即ち、王の念願に依つて、その屍を「アペー」の内に葬つたところ、その屍の側で數限りなく奇蹟が行はれるに至つたのである。

「懺悔王は聖者であられた」と、國民は感激してどよめくのだつた。王の遺骨に近づくために集ふて来る巡禮者の數は、日毎に殖えて行つた。そして一六三三年、エドワアド王は聖人に列せられたのである。宗教心の旺盛な中世にあつては、聖人の屍の側近く葬られることは、とりも直さず死後の祝福を約束されることであつた。だからエドワアド王の後繼者達は、いづれも皆「アペー」に葬られたいと希つた。かくして遂にこの「アペー」が王廟と定められ、又國家的偉勳者のための墓所ともなつたのであつた。今日も尙エドワアドの聖櫃の前に、巡禮が跪いてゐる姿を見ることが出来る。

「チャペル・オヴ・セント・エドワアド」には、エドワアド王の遺骸が一二六九年以來安置してある。中世紀の主な教會では、祭壇の背後に、ペイトロン・セイントの遺物を祀る慣例があつた。そしてこの「アペー」では、そのペイトロン・セイントであるエドワアド王の遺骸が祭られてゐるのである。その遺骸を収めた聖櫃は、ピーター・オヴ・ロームの作で、形は高い爐に似

てゐる。昔はモザイクの黄金も燦然と輝いてゐたことであらう。その周圍には、五人の王と六人の女王の遺骸が柩に納められて、安置されてゐる。高窓から洩れて来る光線が、これらの柩の上に力なく落ち、光線の届かない隅々は殆ど眞暗だ。墓地といふものは、大空の下に擴がつてゐても、せましく感じるものだ。まして室内の墓所は爪先に突き當るやうで、のんびりとならない。無位無官の者の仕合せは、死んでから、自由の天地を墓所に與へられることだなどと、私は考へたことであつた。

更にこの室内の空間を埋めてゐるものは、木材や、金石や、土材で作られ出された諸形像である。しかも固い材料を用ひて作り出されたそれらが、柔い、軽々とした、恰も蜘蛛の巣にも譬ふべき彫刻であることは忘れ難い。人間の手には奇蹟を行ふ力が與へられてゐるのだなども考へる。これらの技術に獻げられた努力は、政治家や將軍の輝やかしい業蹟の蔭に隠れた努力と對比して、恐らく軽重はないであらう。一體、人間がそれぞれ天賦の才能を發揮するために努力の全部を濺ぎつくしてしまつた時、死といふものが到來するのではなからうか。もし然りとせばこゝに葬られてゐる王様達を「闇ベツツの床オヴ・ダークネス」に横たはるなどと、アーピングと一緒に嘆

くことはなくなる。

聖エドワード王の聖櫃の近くで戴冠式を挙げ、以てそのよき保護に與らうとの願望から、歴代の王様は「アペー」に戴冠式を挙げるのである。その戴冠式用の椅子は、平素はエドワード王の聖櫃近くに飾られてゐるが、ゴチック風の樑造りで、今は花鳥模様も剝げ、落書きだらけの粗雑なものである。その椅子の下に、エドワード一世が一二九七年、スコットランドから搬んだスコーンの石が收められてゐる。この石を枕として、舊約の昔ヤコブが夢を結んだといふ傳説がある。スコットランドでは、この石さへあれば、お國は安泰だと考へてゐたといふ。アイルランドでは、戴冠式の際に、正統な王位繼承者がこれに坐れば、石はごんごんと鳴り、然らざる時は鳴りを收めると信じられてゐた。現代のイギリス人は、これらの史的遺物に敬意をもつてゐる。しかし十八世紀のイギリス人は、「一向に面白くない」と、顧みなかつたといふ。十九世紀には、スコーンの石を枕にして寝てやつたなどといふ不敬の人間も現れた。椅子に姓名を彫りつけたのも、十九世紀の人間のいたづらである。

國家的勳功者の祭つてある前を通りながら、イギリスの強味は彼等を所有することであつて、

必ずしも植民地の富にあるのではないことを私は痛感したのであつた。それにつけても、國歩艱難な現今のイギリスに、大政治家が昔と比べて少なくなつたといふ嘆聲を、時々耳にすることを想ひ出す。歴代の政治家、軍人、學者などは、一般人殊に外國人には歴史上名前を知つてゐるだけで、餘り興味はないためでもあらう。彼等に關聯した記念物の前に立ち止まつてゐる人影は少い。これに反しポエツ・コーナー、即ち文人連の像や記念碑の並んだところは、詣うづる人の大部分が何處かで足を止め、感慨深げな様子をしてゐる。これはアーヴィングも嘗て指摘したところであるが、現在でも矢張りさうである。文藝の大衆性のためでもあらう。參詣者はこの七十人、或は八十人の文人の中、誰かの作を読んでゐるに違ひない。又讀んだことのない外國人だつて、シ・クスビヤーの名を知らないものはなからう。チャーサーだつて、ミルトンだつて、皆世界的の作家だ。

碑銘などの中に、自分の語んじてゐる句などを見出したりして、私は暫く楽しむことができた。自分の愛誦したものだと、作家の思想ではなく、もはや自らの思想になつてしまつてゐるので、自分と同じことを考へてゐるわいななどと思つてしまひ、後から、なんだ彼の言葉であつ

たかと、一人苦笑してしまつたりした。この心理を脇の男に見抜かれたやうな不安に驅られて一寸横目を使ふと、隣の男も碑銘を覗きながら一人苦笑してゐる。ふとした機みに彼は私の足を踏んで、思はず「サンキュー」と英國式謝罪の聲を揚げた。こちらも痛いのを我慢して、「サンキュー」と英國張りに應酬したが、五郎劇の一場面を演出した自分を、ポエツ・コーナーに同化した、めだと、時折回想してゐる。

このポエツ・コーナーを一巡して白状することは、亡き作家達の冥福を祈るとか、死者に對して肅然たる敬意を表するとかいふ念の起らないことだ。それは恐らく一般の人の述懐するところであらうが、讀者は作者と自分との間に横たはる時間、空間、境遇などを多くの場合忘れてしまふ。沙翁を讀んでゐる間は沙翁の裡にあるわれわれだ。讀んでしまつた後は、沙翁の思想の一部は、わが思想となつて、われに止まるものである。作者と讀者との關係は、ある意味で一心同體である。従つて作者といふものは、死んでも滅多に冥福は祈つて貰へないのだから、滅多には死ねないよと、忠告してやりたい氣持になる。

このコーナーで、キムデンといふ、一五五一年から一六二三年まで在世した文人の名を覺

えた。彼は「アペー」の案内記を、世に初めて呈した人であつた。今「アペー」のことを書きながら、彼の貢獻を想ひ出してゐる。

王室と國家的功勞者とに密接な關係をもつ「アペー」、イギリス人がそれを誇とし、その存續を祈ることはむべなるかなと思ふ。(昭和十五・三)

## ロンドンの古宿

昨年アメリカで開かれたある會議で識りあつた英人Tは、南京陥落當時の蔣介石の顧問で、政治的にいへば、私とは敵味方だが、個人的には親切で、彼のいふ、好いロンドンの宿を私に紹介してくれた。彼の曰く、「ロンドンに行くなら、僕の定宿グリーン・パーク・ホテルに泊り給へ、君には丁度よからう。」

流石によい位置だ。前は五十三エーカーの廣大なグリーン・パークで、文字通りの綠葉は、四圍の空気を淨化してゐる。昔この公園の貯水池で、詩人シェリーの夫人が投身したと傳へられてゐるが、現今では生命の惜しい人々の爲に、空襲避難所の暫壕が掘られてゐる。公園前を右に曲れば、貴族や富豪の住むパーク・レーン街へ徒歩で約十分だ。ロンドンの有閑豪華な生活は概ねこゝで營まれる。三十萬圓の大理石の梯子段の在る有名なドチェスター家もこの街

に在る。左に曲れば、ロンドン第一の繁華通り例のピカディリー・サーカス、其處にも急ぎ足で十分位。十六世紀頃流行した頸飾ピカディルを賣つた店は今は無く、たゞ名残を街の名に止めてピカディリーと呼んでゐる。惜しいことは此處の支那料理店が日支事變以來、日本人客にお断りを喰はせることだ。勿論イギリス人の顧客で大繁昌だ。兎角支那は、その資源、美術、料理などで、人心を喰はる國だ。そのサーカスへの歩道には、雨の降らぬ朝夕は、保守黨、自由黨、不偏不黨のベイバが數多く並べられる。風鎮は石ころだ。店番の爺は脇に離れて、パイプをぶかりぶかり。買手は大概代金を、新聞の上に、お賽錢のやうに抛けて去る。夜になると焼栗屋、果物屋、花屋が車を挽いて現れる。それらを買つてゐれば、ロンドン生活だつて安いものだ。

ホテルの外観は頗る見すばらしい。一見ディケンス趣味の、骨董品然たるものだ。狭い玄関は男二人が立てば充滿する。一人だけしか通れない暗闇の廊下が七曲り八曲りくねくねとして、踏めば床が凹んでゆく。梯子段を登ると、怪談のおどし文句、みしみしといふ幽霊の音が足許から立つ。それでも、廊下にも梯子段にも絨氈は敷かれてゐる。尤も踏み揉まれて色も模様も



消えてしまつてはゐるが、然し部屋は、幾何學的に整然と裝飾され、あつさりと綺麗だ。十五疊ばかりの室内には二つの長椅子が置かれ、夜は快い二つのベッドになる。デスクの蓋を開ければ、洗面器と變る。其處に通ふのは水道の水だ。卓上の電話で地階の食堂に注文すれば、御馳走は自由、なかなかうまい。窓からは日光も風も自由自在。マントルピースの下には、電気ストーヴが、石炭の形に燃えてゐる。室代は食料なしで、一週間二人分金四磅である。住心地のよさ、宿泊料の安さ、共にこのホテルのよい條件だ。

客 接待が小僧さんなのも氣持がいい。お客の外出とみると、駈け出して来て、「タクシー旦那？」

タクシーの扉を開けてくれながら交すお定まりの彼我の問答は、「旦那、お部屋の鍵は？」

「帳場においたよ」「よろしい、一寸御注意まで」こゝで二ペンスのチップを掌に握らせると、

「サンキュー・サー！」とバッキンガム宮殿を護る近衛兵のやうに、威容を整へる。丁度ミンヘン會議開催中、彼は私に向ひ、

「旦那、愈々戦争は始まる形勢です。」

「えー、それは何處からの發表？」

「いや、私個人の意見であります。チェンバレンは偉いが、ヒトラアは慾張、悪い相手です。」

この十二歳の小僧さんは、同年輩のイトトン・ポイヤ、お客の厚毛の外套を羨しがりなどはしない。他人は他人、自分は自分。自分は自分の義務を果たせば、それでよいのだ。それは彼の遵奉する哲學だ。然し等閑視されないのは、矢張り國の政治や外交だ。ヒトラアは批判せらるべきだと、彼は緊張する。さうだ、グリーン・パーク・ホテルの支配人も、番頭も、チェンバレンも、ハリファックスも皆、この小僧と同じことを考へてゐるのであらう。(昭和十五・二)

## 白塔

十九世紀前半期におけるフランスやイギリスの文人達は、インスピレーションを屢々古代の建築物から得た。例へば、フランスのヴィクトル・ユゴーが宗教と人生の問題を取扱はんとした時、ノートル・ダム寺院からこれを得たやうに。そしてイギリスの歴史小説家エインスウォースがイギリスの歴史的人物を描寫せんとした時、ロンドン塔からこれを受けたやうに。又わが漱石もエインスウォースの「ロンドン塔」に影響されてはゐるが、しかし第一インスピレーションは矢張り親ら見學したロンドン塔から受けたやうである。いやローマンティックな視角からでなく、建築學といふ冷眼を以て見ても、ロンドン塔は魅惑的だといふ。素人の眼には灰色の「塔」であるが、東大工學部の教授佐藤秀之助博士の言によれば、ケント石、ケーン石、ガットン石、チルマーク石、ケットラッグ、白堊等の極めて多彩な石材から成つてゐる塔なのであ

る。

塔といふと、概念的には空に峙つ一つの高い建物であるが、「ロンドン塔」は約十三エーカーの敷地の中に群る大小廿有餘の櫓から成りたつ地城であるのである。

一體ロンドン塔の起原は古い。シクスピアの「リチャード三世」には、皇太子が、「ジュリヤス・シーザーがあつた塔を建てたのか？」と訊ねると、「左様にござります」とバッキンガムが答へてゐる。かくの如く、塔の開祖はジュリヤス・シーザーだといふ傳説がある。そしてローマ人の築いた城塞の一部が、この塔の敷地から發掘されたことも事實である。

しかし歴史家の考證するところによれば、塔の礎石を敷いたのは、ウィリヤム征服王であつた。そしてそれはロンドンの町を外敵から保護し、かつ住民を監視する目的の城塞であつたのである。

ロンドン塔の建物の中には、嘗ては王城もあつた。そしてステイヴン又はヘンリー一世からチャールズ二世に至るまでの歴代の王様は、ウエストミンスター寺院において舉行される戴冠式前の數日間を、このお城に住む慣例となつてゐた。

ロンドン塔は又十二世紀から十九世紀の初期まで、國事犯人を收容する牢獄であつた。又世界大戦當時にも、再び牢獄として使はれたものである。そして、ロンドン塔の主な興味は、この牢獄としての塔にあるのである。

私も一昨年こゝを訪れた。そして角い、丸い様々の形状の塔を仰いで、風雨に磨滅されたこれらの建物のところどころに、新しい煉瓦で継ぎが當つてゐるところや、又石と石の間から草が生えて、秋の風に靡いてゐる風情などを目撃して、人間の生命といふものが、これらの建築物のやうに修復補綴が可能であり、又これらの草のやうに、どこにでも根城を張る精力のあるものであつたら、これらの塔中に繋がれた多くの囚人達の物語も、今日傳はるものとは大分趣きを異にしてゐたものだらうなどと、空想したことであつた。

諸塔中最も古い所謂ウイリヤム征服王の建てた城塞「白塔」は、奥行廿間、間口十八間、高さ十五間、壁の厚さは一丈五尺、四方に角樓の聳ゆる嚴然たる建物で、天に向つて怒つてゐる

如く、テムズの流れを叱咤してゐる如く、又現代を睥睨してゐる如くでもある。

ロンドン滞在中、一度この威嚇的な塔を訪れて以來、イースト・ロンドンの方に首を向けると、距離からいへば見える筈のない「白塔」を、私は空にはつきりと認めるのであつた。用務を帯びてテムズの流に沿うて俤を走らせる度毎に、私はいつもこの塔から追ひかけられてゐることを感じた。歸國した夜、久々にわが枕に頭を載せた瞬間、その枕から抜け出て、我が寢室の闇を塞いだのは、この白塔の面影であつた。

白塔とは、語源が糺したくなる名稱だ。まさにお化けが現れたからといふわけでもあるまい。十三世紀に、ヘンリ三世が、この建物内の王室と外壁を白塗りにしたといふ史實がある。恐らくそれに起因した「白塔」の名稱であらう。今日ではその白塗りは、灰色と化してしまつてゐる。

この塔が私に大いに印象的なものになつた理由は、その外觀にのみ依るのではない。そこに保管されてゐる斬頭臺と、首斬り斧を見たことによるところが多い。斬頭臺は老樹で作つたものらしく、年輪が無数である。十八世紀にハノヴァ家に弓を引いたジャコバイト叛亂に連座し

て、死刑に處せられたサイモン・ロヴァットの首が、この臺の上で刎ね飛ばされたのである。しかもこれがイギリスにおいて斬頭罪に處された最後の首である。それは一七四七年のことであつた。

首斬り斧は一六八八年、初の首落しを演じたものだといふ。現在では既に凄味を失つてゐる。それだけに過去を考へると慄然とする。人間でいへば「角」がとれたので、斧としては恐らく廢物だらう。斬頭吏に幾度か磨かれてゐるうちに、刃が減つて、かくも粹きな形に變つてしまつたのだらう。この斧を磨きながら、斬頭吏が歌つた鼻唄は、落書きの残つてゐる厚い壁の中に今は吸ひ込まれてしまつて、撫でど叩けど聞えてはこない。その石壁のそこゝに彫り込んだ文字は一五五四年以來のもので、メリー女王とスペインの王子との舉婚に反對した暴徒の一味が、獄中生活の堪へ難さを、落書きに紛らさんとした跡である。荒くれ男達ですら、幽閉の憂さ、悲しさ、恐怖を追ひやることができなかつたのだ。

私は今廿五年間この白塔に捕虜となつてゐたシャルド・オルレアン公のことを想ひ出す。彼は有名な中世の詩人であつた。しかし彼の捕虜となつたのは筆禍によるものではない。一四一五年アジンコートの戦ひに、英王ヘンリ五世と戦つて、オルレアン公として敗れた結果によるものである。私の空想は、彼の獄中生活を展開してゆく。

ほの暗い一室に鏡面が光つてゐる。其處に映つてゐるのはラテン型のオルレアンの顔だ。その顔は、おのれの幾筋かの白髪に驚いてゐる。彼は一人嘆きの言葉を抛げる。「老いたるもむべなるかな、早この塔に來り住んでこの方廿年あまりを過せり。武運つきし我なれど、文運はつきず。後世われシャルド・オルレアンの名は公としてならず、一介の詩人として記憶せらるべし。しかもわが詩の多くは、この白塔に於て詠まれたることも傳へらるゝなるべし」。

雨衣、風衣はた寒む衣

捨て、

まばゆき

陽の刺繡の

衣を着けたる季となりぬ

この詩は、彼の作「春」の一節で、中世紀に自然を歌つたものの中の佳作と價值づけられてゐる。それは、おそらく白塔の高い窓から彼が見下した娑婆の景色だつたらうと、塔に關する最古の繪畫「塔におけるオルレアン公」中の彼の一ポーズを當てはめて考へる。

獄中の生活に堪へかねて、これを脱しようともかく囚人もあつた。ウイリヤム征服王に仕へて、かのドームズデー・ブックの編纂に功績のあつた、しかし、策動家なのでパロン達からも毛嫌ひされ、ヘンリー一世の時遂に幽閉の身となつたダラムの司教フランバードが「白塔」から脱出する光景を私は今空想する。

白塔の下に、一人の騎士が、馬上から叫んだ。「ダラムの司教め、投獄されていゝ氣味だ！」そして騎士は黄金造りの太刀を抜いて、塔をつき刺した。塔はびくりともせず、ことりともせぬ。しかし騎士は満足氣に馬に鞭をあて、驅け去つた。その足搔きに立つ塵が高く昇つてゆくの上を見てゆくと、一つの窓に人影が動いてゐる。その影は窓から飛び出たと見る間に、稲妻の速力で、一直線に地上に落ちて來た。地上には幾つかの人影が無言裡に扶けあつて動いた

が、やがて一齊に散じた。地上は寂然として聲がない。たゞ丈夫な繩が渦を卷いて投げ捨てられてゐた。塔上では、フランバードにふるまはれた酒に酔ふた獄吏達が何事も知らず、上機嫌でゐる。それは一一〇一年四月二日の事件である。これがロンドン塔最初の囚人、そして最初の牢破りと傳へられてゐる。(昭和十五・十一)

## チェンシャヤ・チーズ

一九三八年の夏、私はアメリカにおけるある晩餐会で、カナダの新聞王D氏に訊ねた。「最近私はロンドンに渡るが、見落してならぬものはなんでせうね?」「そりや君、フリイト・ストリートとチェンシャヤ・チーズだらうね。ほら、ジョンソンやディケンズが最良にしたといふあの料理屋さ。英文学と關係が深いばかりでなくピフテキがともうまい!」

流石新聞人だけあつて、まづ第一に、新聞街のフリイト・ストリートが頭に浮んだらしい。彼は新聞記者の機敏性を働かせて即座に、丁度そのとき食べてゐたアメリカのピフテキを、正直に、皮肉まじりに、しかも、禮は缺かずに、批評したのであつた。

私はこの時想ひ出した。それは十九世紀のデイリ・テレグラフの記者ジョージ・セーラのことである。彼は巴里に赴き、六ヶ月間に亘つて、フランス料理に就いての讃辭とイギリス料理

に就いての罵倒を新聞紙上に連載した。やがてロンドンに歸つて來た彼は、まづ「チーズ」(ロンドン人はかう省略する。)に駈け込んだ。「おい給仕、ピフテキと、ちやがいと、それからビールを一杯なあ、頼むぞ、俺は六ヶ月間食ふものがなかつたんだ!」

そして私はアメリカのピフテキを嗜みしめながら、ロンドンに渡つたら、チェンシャヤ・チーズに行かうと決意したのであつた。

“Ye Olde Cheshire Cheese” rebuilt 1667 と記した赤い店燈が、賑やかなフリイト・ストリートの裏町、ワイン・オフィス・コートの中の暗い、石敷きの路上に火影を落してゐた。地震、雷、火事の災害にも、おやぢの亂暴にも遭はずに、二百卅三年間かうして無事に建ちつゞけてきたチェンシャヤ・チーズの入口は、イギリスの文學史が誇とする多くの文豪の出入したものである。私はその狭い、みすぼらしい入口の戸を開けたのであつた。

案内された食堂は、二百卅年前と少しも變らないと教へられた。狭い部屋である。三人掛の檯のベンチが、檯の長いテーブルを挟んで並んでゐる。なにか田舎の教會に似た風情である。くすんだ丸木のわたつた天井は低く、そこから吊るされた瓦斯燈の光は、夜が更けるにつれて

ますます汚れてゆき、大きな爐の焰は次第に赤く燃えてゆくのであつた。床には昔風にをが屑が撒かれて、靴の音も、靴の泥も皆その中に消えてしまふ。フランスでは葡萄の木のをが屑が料理屋の床に香つたものだつたといふことを、ふと思ひだした。燕尾服の給仕人の動作が敏捷で、慇懃である。窓際の固いベンチに坐つた私に、給仕人は低聲で言つた。「旦那の席はサムエル・ジョンソンの定席でございました。そのお隣りがゴールドスミスでございましたよ！ Sir」全くドライデン・ボープ、ジョンソン、ゴールドスミス、ディケンズ、サッカレ、テニス、皆このチェシャヤ・チースの櫛のベンチに腰をかけたものだつた。現代人の眼にはみすばらしいまで無裝飾なこの食堂を、楽しい場所として、固いベンチに快く坐して、議論に興じてゐた昔の文人達の生活と、彼等の作品の裡にわれわれが認める堅實性といふものを結び合はせて考へずにはゐられない。

ジョンソンは晩年をこのチェシャヤ・チースに入浸つてゐたといふ。従つてチェシャヤ・チースでは、ジョンソンを現在でも「ドクター、ドクター」と一番大切なお客として扱つてゐる。彼が自宅で始終使つてゐたといふ櫛の肘掛椅子は、チェシャヤ・チースの家寶の一つとして保

存されてゐる。そして、これを指摘しながら「これに腰を掛けた肥大なドクターは王様よりも王様らしかつたさうです Sir」などと給仕が、私に説明してくれた。その傍らに、彼の初版の字典があつた。恐らくこの椅子に腰をかけたが彼の書いたであらうこの字典の「からす麥」の説明、「イギリスでは通常馬に與へる穀物だが、スコットランドでは、人間を養つてゐる」などを思ひ出したことだつた。彼は、タヴァーンの雰圍氣が好きで、タヴァーンの門を潜ると、憂ひも、孤獨感も忘れてしまふと述懐してゐる。彼はこの椅子で仕事をし、食堂のあの櫛のベンチで、仕事の疲れを忘れたのだつたらう。

ジョンソンの脇にいつも坐つたといふゴールドスミスのおでこと彼のピンクの着物が想ひ出される。ジョンソンが獅子吼するに反して、ゴールドスミスは一見極めて平凡人で、ジョンソンの言葉を遮つたことがなかつたといふ。彼は議論を楽しむよりも、黙々として、むしろこのタヴァーンに這入つて来る各階級の人々の性格を一々観察することに興味をもつたらしい。この時代の各階級の人々は一日の仕事が終ると、家庭の夕食時まで、タヴァーンで語りあつたものであつた。「ウエクフィールドの牧師」の一部は、ゴールドスミスがチェシャヤ・チースの向

ひ側に住んでゐた頃、書かれたものだ。大ぼら吹きのとてん師や、正直な田舎の牧師さんの顔は、恐らくゴールドスミスがあつたのベンチから盗み見てゐたものだつたらう。

チャールス・ディケンズも「二都物語」の中に、このチェシャ・チースの食堂を背景に使つてゐる。カートンといふ男が、男主人公の顔を凝視しながら、女主人公のために、この食堂で乾杯するところがある。杯を高く擧げる機みに背後の壁にぶつけて、杯を粉微塵にしてしまふのである。その極張りの壁の汚點を私が凝視してゐると、例の給仕がまた囁いてくれた。「これはジョンソン初め有名な文豪達の冠つてゐた壁の油の汚點でございますよ Sir」

やがてカナダのD氏が賞揚したピフテキが撒かれた。肉の大塊の両面を烈火で二分間焼いたのだ。じうじうと餘韻のつきないところを、食べる。ウエストミンスターの議場の、ヒヤヒヤの聲を萬分の一に低めたら、多分このピフテキの吐きにならう。肉の熱は永遠性をもつてゐて、大塊の最後の一片まで冷めるといふことがない。だから、舌觸りは柔くてしかも脂の觸感はない。

い。味の濃やかさは虹の色に譬ふべし。一度味つた印象は、生涯薄らぐことなく、従つて、経験者は折に觸れ時に觸れて、無形の響應を樂しむことができる。その香りは、ダンテ式に説明すれば天國にある料理人の圈に達する梯子でもあらう。

しかしチェシャ・チースの自慢料理は、冬の、肉のブディングである。木枯が吹いてくる時、このブディングの香りは辻を超え、街を走つてロンバード・ストリートの株式市場の邊りまで漂つてゆく。

ブディングといふが牛肉、肝、雲雀、かき、茸などの薄片れをクラストに包んで十六時間から廿時間煮込むのである。目方は四十ポンドから八十ポンドもあり、量は三四十人に盛つても尙餘裕がある。調理法は代々のチェシャ・チースの主人にだけ秘傳されるもので、主人は大體料理人を斥けて一人で調理するといふ。この秘傳の料理が客前に撒かれる時は、なかなかの見物であるといふ。まづ燕尾服に威儀を正した主人が四五人の召使を従へて、かのブディングを捧持して食堂に繰り込む。そしてテーブルの上に、靜かに下ろして、大ナイフ、大匙を揮つてブディングを切り割る。びしびしとクラストが音を立て、破れてゆくと、こげ茶色の煮込汁



が逆り出て、食堂にはブディングの香が漲る。三、四十人の見物人は涎をこつそり飲み込んでゐる。

傑作ブディング史に、たつた一度悲劇が起つたことがある。給仕が足を滑べらしたために、傑作がそのまま床に落ちて、壊れてしまつたのである。暫く茫然としてしまつた主人は、室外に退いて獨りさめさめと泣いた。そしてブディングを待ちあぐんでゐた三四十人のお客連は、脱いだ帽子を二度冠つて、無言のまま、すてごと退却して行つたといふ。

一八九二年四月四日の Court Journal に、このブディングに就いての面白い記事が載つてゐる。紐育のバラスといふ男が、このブディングを、アメリカに残した妻子や友人に喰べさせたといふので、荷作りよろしく大西洋を無事に提げて渡つたが、紐育に着くと、問題が起つた。税關が八釜しい。マッキンレイ關税法中には、罐詰、瓶詰類の項目は規定されてゐるが、「ひばり」のブディングは罐詰でも、瓶詰でもなく、又「製マニファクチャー品アーティクル」にも該當しない。どういふ項目の輸入品に入るべきかが分らない。従つて課税標準がつかぬといふので、一週間の小田原評定となつた。バラスは「ひばり」のブディングの披露宴に招待する知人達に案内状は差し

出したものゝ、ブディングが招待日までに、渡してもらへるかどうかわからないので、やきもきするのだつた。やつと渡されたブディングはしかし、腐つてゐるところではなく、形も、色も香りも味も少しも損じてゐなかつた。コート・ジャーナルの記事はそれだけだが、バラスもお客連ももろともに、キイツやシェリイやテニスの「ひばり」の詩を想ひ出しながら、テニスのいつた、いはゆる「體は見えず聲のみ」のひばりではなく、「聲はない體のみ」のひばりの現實性を樂んだことであらう。(昭和十五・十)

## 鐘塔のモーア

ロンドン塔中の一つの建物に、鐘塔といふのがある。その塔上の鐘は、諸行無常とは響かなかつたらしい。それは櫓としての立場から、敵の襲來を告げては鳴り、牢獄としての立場から、囚人の脱走を告げては鳴つた鐘だといふ。この慌しい鐘の音に、もろもろの櫓の獄舎に繋がれてゐる囚人達の眠れる者は夢より醒め、憂愁の首を垂れてゐる者は、首を擡げ、石壁に指の爪を以て落書をしてゐる者は、その指を休める。あの非常の鐘があるひは自分達の釋放に導くでもあらう事件の勃發を告げるものではないかと胸をときめかす。

これらロンドン塔の囚人達は殆ど悉くイギリス朝野の名士で、王や時めく爲政者達の専斷に依て幽閉されたものが大部分である。だから無辜の者が多い。いや天下無双の才徳兼備の士さへも、繋れて殺されたのだ。中で、もつとも惜しむべき人材は、トマス・モーアであつたとい

へよう。彼が死刑に處せられたことを聞いた皇帝チャールス五世は、わざわざイギリス大使を宮廷に召して言つた、「あのやうな人物を失ふ位なら、朕はむしろ大都市の一つを失ふ方がよい」そしてチャールス皇帝ばかりではなく、イギリスにおいても、又フランス、スペインにおいても、モーアの死を悼み、彼を死刑に處したヘンリ八世を非難する聲は高くなつた。只ヘンリ八世は、法律上當然の死刑だ、あの十倍もの苛酷な刑罰に處すべきだと憤然として言つたといふ。

私はハバートの筆になる、獄中のトマス・モーアの顔の東洋的な點に一驚した。それは口元から顎にかけての輪廓である。一見極めて靜寂な風貌であるが、彼の道徳と宗教への服従の意志が歴然と表現されてゐる。この輪廓が一分違つたとして、それが彼の道徳と宗教への服従の意志が實際より一分缺如してゐる結果となるなら、彼の最後は次の如きものではなかつたに違ひない。私は獄中のモーアを空想する。

星月夜である。鐘塔の鐘は鳴りを鎮めてゐる。その鐘塔の獄舎に、モーアは今眠つてゐる。その見てゐる夢は、彼自身の過去の閱歴である。

一四九七年、私はロンドン市長の招宴に列してゐる。私は正面に坐つてゐる紳士と話し始めた。なんたる才氣煥發！ たゞ人ではないと思ふ矢先きに、紳士の方から、「貴君はもしやモーアさんでは？ それとも幽霊さん？」といはれて、はつと紳士を見上げたが、「さういふ貴君はもしやエラスムスさんでは？ それとも悪魔さん？」と問ひかけて私は笑つた。そして彼も笑つた。

ラテン語、ギリシヤ語に精通したいはゆる當代隨一の、北方人文主義の巨星と奇遇したことは、私の生涯に劃期的事件であつた。私も法律を學ぶ前には、オックスフォード大學で、ギリシヤの文獻にも親しんだものだつた。エラスムスとの會見で、私のギリシヤ語熱が再燃してきた。學に志すはよし、直ちに奮勵努力すべきだ、完成まで努力を續けるべきだ。

机に向つてゐる私に、何處からか、お前の両手を出せといふ聲が聞える。思はず両手をさし延べると、掌に一冊づゝ書籍が載せられた。見ると、一つは私のギリシヤ譯又一つは私の「ユートピヤ」私が呆れてゐると、私の肩を叩く者がある。「どうしたモーア君」とエラスムスが笑つてゐる。

「ギリシヤ譯は、君と面識したお蔭だね。時にこのユートピヤね、私のラテン語は、君のラテン語の足許にも及ばん！」

「僕に及ばなくつたつて、イギリス第一ならいゝだらう！」といつて、エラスムスはからからと笑つた。

一四九九年から一五〇三年までの私である。暗い僧房で、私は一人跪いて、罪深き自分を省みてゐる。私はキリストの完徳を思ひ、贖罪のためのキリストの苦難を思ふ。壁を仰ぐと、荆の冠を冠つたキリストの像がある。私は立ち上つて、苦行の一端として、素肌に着てゐる荒毛

のシャツを脱ぐ。このシャツは常に私の肌を不快に刺してゐるのだ。私は答を取り上げて、自分の體を答うつ。答の跡は、紫色の痣だらけの私の體に、赤い曲線となつて残る。

エラスムスが顔を出して、「君僧侶生活は趣味にあつたかね」と微笑む。

「いや、私は趣味を基礎に自分の生活を決めない。私は私の踏むべき唯一の道として、自分の生活を選んでゐる。今の私には、この苦行の生活が唯一の義務と考へられるのだ」と私は低い聲で、エラスムスに語つてゐる。

カルト家の三人の娘さん達と私は話をしてゐる。實に愉快だ。無邪氣な泰平な物語を彼女等は聞かせてくれる。二番目の娘さんが私は一番好きだ。しかし姉娘をさしおいて、妹娘に結婚を申込みなすことは、秩序を亂した行ひで、禮に缺ける。私は姉娘さんと結婚することによつてと決心する。

一五〇五年、私は花婿として、カルト家の長女の腕を携へて、聖壇の前に跪づいた。「天にお

いては天主に光榮あれ、地においては正しき心の人に平安あれ」といふ讚美の聲が、天上から聞えてくる。仰ぐと、ラファエルの描いた三人の幼き天使がバラの花を撒いてゐる。

一五二五年、私がランカスター公領のチャンセラーであつた時代チェルシーの邸の居間に私は讀書をしてゐる。執事が這入つてきて、「只今突然王様が成らせられました」といふ。クック部屋では、大騒ぎだ。王様の突然のお成りに、晚餐の用意を始めなければならない。獻立に、肥満したクックが鼻頭を赤くして、首をひねつてゐる。

王様と私は芝生の園の上を逍遙してゐる。一時間にもわたるこの逍遙の間中、王様は私の首に御自身の手をかけてゐられる。そして、星空を仰がれる。「モーアよ、又流星が飛んだ、あの流星の神祕を、私は時々考へる」と仰せられる。私も空を仰ぐ。あの流星よりも速かに變る、王様の諸臣に垂れ給ふ寵愛を、私は考へる。急に、王様の手壓が強く首に感じられる。首が苦

一五二九年、私の大法官時代である。ウエストミンスター・ホールで、法服を纏つた私は訴訟を聴いてゐる。午前八時から十一時まで、そして又午後も、訴訟を聴く。裁判官は公平でなければならぬ。私心あるべからず、而して事務を慎重且敏捷に處理すべきだと、私は頭張る。

モーアは夢から醒めた。音もなく月は消え、星も消えた。鐘塔の鐘は依然黙々としてゐる。今モーアは荒木の床ベドの上に目ざめたのである。そして、自分は塔の生活に甘んじてゐると思つてゐたが、過去の夢を見るところは、過去に執着があるためなのかなと、首を傾げる。そして立ち上つて、跪き、首を垂れて朝の祈りを始めた。

ある日、四人の役人がモーアを訪ねて来た、不愛想な顔付きで、一人がモーアに質問する。

「博士、法律に明記されたやうに、王をイギリス教會の頭とお認めになりますか」

「さういふことにはお答へはできませんわい」

「博士、王とアン女王の御成婚を正當とし、キャザリン前女王との御結婚は不法であつたとお認めになりますか？」

「さういふことには、私、關係いたしませんのちや、又お答へも申上げられませんで。私は只神への奉仕のみを念願してをりますのちや」

寛容な顔をしたモーアの口から發する嚴然たる言葉を、無愛想な役人共も追及はなしえなかつた。彼等の立ち去つた後、牢番のジョージが這入つてきた。

「先生、犬共が出て行つて安心いたしました。どうなされたかと、御案じしてをりました。それからお手紙が参つてをります。お嬢様のローバー様の奥様から」

「マーガレットからか、あれはいつもわしのことを考へてゐてくれるわい。時にジョージや、私に來た手紙類はみんなお前保管してゐてくれるだらうな。他日私の牢獄生活の一つの證據と

なるからな。」

「いゝ先生、あれが見付かつた日には、私の首がちよんぎられませあ、祕密なお品は、火の中が一番安全な仕舞ひどころ、まあまあ御安心なまつて下さいませ、悪いやうには致しません」

モーアは娘マーガレットの手紙を読む。いつもながら、父を想つてやまない、切々の情を訴へたものだ。どうぞ何も言はず、王様の御旨に従つて下さいと、哀願嘆願してゐる。モーアは獨り呟く。

「マーガレットよ、私はお前の心中がよく分る。もし私がお前の父親といふ以外に他の立場がなかつたら、私はお前の言葉に従ふ。しかしマーガレットよ、私は、お前の父である前に、神の僕であるのだ。私は神に背くことはできない。したがつて良心の咎めることはできない。お前は、私が訊問を受ける度に、返答を避けてゐるのを知つて、あるひは私が死刑を免れる意志があると理解してゐるかも知れない。しかしマーガレットよ、お前の父親は、死刑を怖れてゐるのではないのだ。たゞ自らを斬頭臺に急がせるやうな言行を慎みたいのだ。神が與へ給ふ殉教の刻限の自然の到来まで生きることが、私の義務だと考へてゐるのだ」

モーアは机に向つて、書き初めた。

「余は王の忠臣、日々王のために祈る者だ。王のため、王の御一族のため、又國家のために祈る。自分は悪をなさず、悪を思はず、すべての人の福祉を希ふ。しかしこれを以て生存の價値なきものといふなら、余は生くることを欲しない……」

モーアから、書籍も、ペンも、インキも取り上げられる日が來た。そして彼の入獄生活一年後のある日、彼はロンドン塔から、ひき出された。それはウエストミンスター・ホールにおいて裁きを受けるためであつた。

一年間の獄中生活に、彼の毛髪は眞白に變つてしまつた。その伸びた白髪を、ロンドンの夏の風が吹き亂す。凹んだ眼には、久々の外界の刺戟が、しみて痛い。衰弱した體を、杖に支へながら、忠臣であり、賢臣であり、又義人であるモーアは、裁きを受けるために、ウエストミンスターまで歩かなければならなかつた。

ウエストミンスター・ホールにおいて、嘗ては正義の判官として人を裁いた彼が、今日は、その同僚の判官等によつて裁かれねばならぬのである。彼等は彼の罪狀を多言を以てまくしたて

て、モーアに返答に惑はしめようと計つた。勿論それはモーアに看破され、かへつて峻烈に反駁された。

もし王の意に従へば、無罪とするといふ條件を、モーアは斥け、さて言つた。自分は王とアン・ボレーンとの結婚については意見を公言したことはなかつた。王の教権を否認したといふこともない。それに就ては、自分は沈黙を守つただけである。沈黙は大逆罪ではない。この時検事次長のリッチが陳述するには、「被告人は、牢獄に於いて、自分に向つて斷言したことがある。即ち、靈魂上の事柄に就ては、國會は何等権限をもつてをらぬ。したがつて王を教會の首頭と決める権利をもつてをらぬ」

モーアはこれを虚偽の證言であると、敢然と拒否する。

判官達は、先例を破つて、沈黙は大逆罪なりと説示した。そしてこれに基いて、陪審は直ちに、有罪評決を言渡したのである。

彼は法律家として、沈黙は大逆罪を構成せずといふ先例を知つてゐた。だから法律的用意周到を以て、おのれの正しい立場を保護してきた。そのために彼は獄中で訊問を受けても、自

分の意見に就ては、沈黙を守りつゞけたのである。しかし有罪と評決された以上、彼はもはや沈黙を破るべき機の到来を認めたと。そして判事と聽衆の面前で、毅然としてその意見を披瀝したのである。

「今は自分の意見を公言する。首長律は全然違法である。この問題に關し、こゝに同席する諸君と私が意見を異にすることは残念だが、自分は良心に従はねばならない。しかし諸君を決して敵視してはゐない。私は神が諸君の上に、殊に王の上に恵を垂れ給はんことを祈る」

モーアはその雄辯を以て民衆を蜂起せしめる力があつたにも拘らず、かゝる手段をとらなかつた。たゞいふべきことを、簡単に言つたのみである。これは彼の長い間の沈黙が、決して死刑を怖れてゐたのではなかつたよき證左の一つである。

彼は大逆犯人として、死刑に處せらるべく、塔へ送還されてくる。塔の堤上には、娘マーガレット（ローパー夫人）が待つてゐて、群衆を押しわけて父モーアの首にすがりつく。そしてよゝとばかりに泣く。モーアもまた泣く。群衆も皆泣く。護送吏も暗然として、無言のまゝうつむく。

それから四日の後、モーアは塔内の死刑場に送られた。その時のモーアは生の執着から完全に解脱した自由人となつてゐた。そして最後の瞬間まで、洒落もいふ、茶目もいふ緯々たる餘裕を見せてゐた。

王様の特別の思召で、はりつけ、八ツ裂きは許され、斬頭のみで處刑だと言ひ渡されると、モーアは呟く。「かういふ難有い思召には、わしの友達には與らせたくないわい」

彼は斬頭吏に向つて、

「君、わしの首は短いから、その積りでね。仕損じるなよ、職業的名譽にかゝはるぞ」

それから彼は、自分は王の忠僕として、正しきキリスト信者として死んでゆくと公言した。彼の首はロンドン橋に曝された。ヘンリ王が親愛の情を示すために、自らの手で抑へて離さなかつた首、マーガレットが最後の愛情をとりすがることによつて示したこの首、モーアが自ら「短い」と形容したその首が刎ねられたのは、一五三五年七月六日の出来事であつた。

中世以降ヨーロッパの歴史に見られる教會と國家との激しい相別は、宗教と國家との争ひであるよりは、むしろ普遍的な政治機構と國民的政治機構との争ひであつた。そして前者は漸次後退し、後者が漸次優位を占めるに至るのが、中世史から近世史への進展過程であつた。ヘンリ八世のアン・ブリーンとの結婚、首長律の制定、僧院の抑壓は、この大きな歴史的潮流を促進する一聯の事象に過ぎぬのであらう。しかし教會といふ政治機構は、個我的宗教的信念と不可分離に結合してゐた。鐘塔におけるモーアは、かうした事情の下における、近代國家成立に伴つた深刻な悲劇である。(昭和十五・十二)



## 古物市

世界大戦史を読んだ者は、世界大戦當時、ドイツと通謀してイギリスに謀反を企てた愛蘭士人サー・ロージャー・ケイスマントを知つてゐる筈だ。更に彼が死刑に處せられた、ベントンヴィル監獄の名をも知つてゐることであらう。しかしそれらは政治學徒にとりてこそ興味のあることであるが、大してロンドン兒の興味を惹くことではない。それよりも、そのベントンヴィル監獄の直ぐ近くにカレドニアン・マーケットの在ることの方が、ロンドン兒には大切なことなのである。

昨年ロンドン滞在中、ドイツの土俗法學の大家A君に、ロンドン名所の一つとして案内されたのが、このカレドニアン・マーケットだつた。

尤もこのマーケットでは、毎月曜日と木曜日には家畜の市が立つのだが、有名な古物市の立

つのは、金曜日と火曜日なのである。そして私が案内されたのも、その火曜日であつた。

五十エーカーの廣場の殆ど全部を埋めた三、四十の天幕の上に、ロンドンの秋の陽が照り、冷ややかな秋の風が渡つてゐた。その天幕の中には、世界各國の人間が、その精神力と肉體力とを傾けて創造した美術品、工藝品、書籍などの古物が、或は整然と或は雜然と並んでゐる。嘗ては賞玩され、秘藏され、有用視されたこれらの物は所有者の經濟的事情から、或は新奇を追ふ我儘から、或は破壊されたといふ理由から、或は盗人から、かうして古物商の手に渡つたのだらう。その一々の歴史を想像しながら、それらの物品を凝視してゐると、不思議と買慾が起つて来る。それは社會の第一線から退却を餘儀なくされた物品に、無意識裡に同情してか、それとも他人の物なるが故に欲しくなるのか、安いから買つてもよいと思ふのか、いや恐らくそれらの總てが合した心理状態から、買つてしまふお客が多いのであらう。

勿論、趣味や研究の對象として買ふお客も無いとは言はない。A君などは、考古學にかけては一かどの權威なので、自然視線はスタテュー等に走る。直感で取上げたブロンズの小像を暫く嚴密に検討してゐたが、三志六片といふ價格を二志に負けさせ、さてこつそり私に私語くには、

「これはなかなかの時代物、アラビヤ物ですよ、獨逸に行けば十五、六マルクは請合です。机の上の置物には好いですよ、饒舌りませんからね」

種々説明を訊かされると、どうやら値打ちが光つて来る。この時私は、ルーヴルの博物館で、モナ・リザの畫像の前に觀衆が群つてゐる姿を想ひ出した。モナ・リザに世界的價値を批評家が付けなかつたら、恐らく見られなからうあの觀衆を、A君の傍に立つてゐる自分と比較するのだつた。

パイプ店がある。店番のお爺さんはサー・ウオター・ロウリに似た顔付で、ぶかりぶかりパイプを吸ひながら、お客には一向頓着しないらしい。山高帽の老紳士が、並んでゐるパイプを一つ一つ取上げて觀賞してゐる。陶器製の不恰好なパイプは十八世紀頃のイギリス製だらう。メーシムのパイプ、ブライヤーのパイプ、最近流行のハリケーン・パイプ、どれも老紳士のお氣に召したらしいが、他人の涎を想ひ出したものか、總てを舊の位置に返して、暫く立つたまゝ見惚れてゐた。店番の爺さんは眉一つ動かさず、黙々とパイプを吸ひ続けるのみである。

アメリカのダンロップ教授に依れば、人間は冗談を言つても煙草を吸つても血壓が高まるが、

煙草に依る血壓の方が人體には害が少いといふことだ。パイプ屋の爺さん、お世辭の代りに煙草を吸つて、長生きしようと思つたものと見える。

古本屋で、手當り次第頁を繰ると、埃が秋の風に飛ばされる。思はず嚏をして、そつと四邊を見廻すと、焼栗屋が車に仕組んだ釜を引いて、近づいて来る。栗屋さんは低い聲で「旦那、あつたかい栗は如何？」

あちらを向けば、コフィ・ストールにお主婦さん連が、帽子の無い頭の、褐色の毛髪を秋風に吹き亂されながら、カイクを嚙り、コワイを飲んでゐる。腹を拵へてから、買物をしようといふ眞剣振りである。全く彼女等にとつては、そして更に貧しいロンドン兒にとつては、このマーケットは、必要不可欠の施設である。古着、古家具は勿論豊富だが、ことに眼を惹かれたのは、粘土色、凸凹だらけの蓋のなくなつたニーム鍋、踵の曲つて減り損じた女靴、色の褪せた黒靴下の片方、骨の折れた木綿の雨傘、などが賣れてゆくことである。

日本の象牙細工や漆器類が、支那人の店で賣られてゐた。日支事變などいふものは、このマーケットでは考へないでよいことらしい。

市場は時の移るにつれて、客が混雑して来た。これでは迷子になりさうだ、A君はマーケットの中央に聳える時塔を指して「彼處が迷子の溜所なんですよ、いゝ目印でせう」と笑つた。値切る聲、せり上げる聲、笑ふ聲、相談する聲、それらが相合して、人間の慾の、音に響けとばかり、ぐわんぐわんと響いてゐる中に、時塔は十五分毎にチャイムを歌ひながら、人間を待つてくれない時の経過を報らせてゐるのであつた。

最後に、お馴染の「マーケット・オーヴァート」の法理が想ひ出される。つまり、かうした市場で、買物をした男や女の権利が十分に保護される英國賣買法の法理は、このカレドニャン・マーケットをも成立せしめ、繁榮せしめる奥祕の一つなのである。(昭和十四・七)

## 詩 聖 郷

霧と煙と混つた灰色のロンドンの町の中で毎日仕事をするロンドン人にとつて「ウィーク・エンド・トリップ」は贅澤といふよりは、むしろ保健上必要な注意なのである。週末旅行は、ロンドンでは、上は貴族から下は工場労働者に至るまで、怠らずに行はれる近代的習慣の一つである。

そればかりでなく、ロンドンでは我々の思ひは自然に時代の浪に流される。曰く、クライシス、曰く、空襲の恐怖、曰く、ミュンヘン協定、曰く、日英關係の悪化、さういふ我々の心を劇しく動搖せしめる雰圍氣から一時離れて、思ひをより永遠的なものに向けたいと希ふのも人情の自然である。

かくして晴れ渡つた或る日曜日、私は沙翁の聖地を訪れて、十六、七世紀のイギリスと超世紀的な詩聖とを偲ぶことゝしたのである。

ストラトフォード・オン・エイヴンは随分と古い町である。發掘された貨幣から判斷して、町の起源をローマ期に遡らしめる説さへもある。それは地理的にはエイヴン河西岸の小さなマーケット・タウンに過ぎないのであるが、文學史の上では、なんといふても超國家的價値をもつ、押しも押されぬストラトフォード・オン・エイヴンだ。沙翁誕生の聖地は、このストラトフォード以外には、何處にもないからだ。

ワシントン・アーヴィングではないが、この土地を訪れる者の關心は、常に沙翁に集中する。そして沙翁を通じて観るとき、總ての常套的なものも價値づけられ、有意義とされるのだ。

一五六四年四月廿三日に沙翁が呱呱の聲を揚げた家は、保存に細心の注意が拂はれるためでもあらう、又時間と自然との腐蝕力も、特別に御手柔かだつたお蔭でもあらう、破損が割合に

少い。屋根に三つの破風をもつた開口の廣いこの家は、白壁に褐色の細木を井桁に組んだ、いはゆる「ハーフ・ティンバー」造りである。恐らくヘンリー七世の時代、一四八五年頃に建てられたものだらうと言ふ。

沙翁誕生の間は二階にあるが、天井が低くて、往來に面したた一つの窓から射し込む陽がなければ、まるで座敷牢のやうだ。その窓ガラスや壁に一杯に落書きされたのを調べると、サッカー、スコット、ブラウニング、カーライルなどのお馴染みの署名が讀める。一體落書きなるものは、小學校の一年生と御用聽き位に相應しいものであらうが、偉人の前に出ると、こんなお歴々の文人達までも、から子供の眞似位しか出来ないものらしい。

階下の一室に沙翁の椅子といふのがある。煙突の傍のこの椅子に少年時代の沙翁が腰を掛けて、爐の焰を見詰めながら、空想に耽つたことであらう。空想の對象は、世間話、村芝居、アーサー物語だつたのではないか。この椅子はある皇族がお買上げになつたが、何時の間に、どうしたとか、再び舊の爐端に置き据ゑられてゐる。多分アラビヤ物語の魔法椅子のやうに、飛行性があるのかも知れないと、誰かと言つてゐる。兎に角沙翁に肖りたいとて腰を掛けてみ

る來訪者の物凄さは、三年に一度櫛のこの椅子底を張替へねばならぬことに照しても明らかだ。只天才といふものは傳染性がないらしく、皆の熱心にも拘らず、第二の沙翁は未だに何處の國からも、現れ出て來ない。

この家と沙翁との關聯は、單に彼の誕生に據るものではなく、彼の生ひたちと結婚も亦この家で營まれたのであつた。

百姓を祖父に、商人上りの町の役人を父にもつた少年時代のストラトフ・レドは人口僅かに約四百人、その大部分は読み書きにも不自由であつたやうだ。町政に參與する者は肉屋、小間物屋、八百屋さんといふ手合ひであつた。如何程沙翁が天才でも、かゝる人達とばかりの交際であつたら、彼の傑作は現れなかつたであらう。幸ひにも十六世紀は普通教育が普及され、上下を通じて子女の教育に心を傾倒した時代であつた。少年沙翁も亦「グランマ・スクール」で朝の六時から夕の六時まで、毎日読み書きを學んだのが、B・A・の稱號をもつたスミス・ハント先生の下であつた。「戀の骨折損」の中に出て來る *horn book*、「陽氣な女房」に出て來るウイリヤムがエヴァンスからラテン語を復習して貰ふところは、彼の學童時代を偲ばしめる好資

料である。彼が十二、三歳の頃父親が破産して、一家は生活苦を嘗めるやうになつた。彼が學校を中途退學して、丁稚奉公に出たといふ話も傳つてゐる。又父親の手傳で、威勢よく轡を屠つたりもする彼だつたと言ふ。

彼は齡十八歳で、八つ上のアン・ハサウエイとの結婚生活に入つた。彼女の生家は彼の家から程遠からぬ田舎にあつて、矢張りハーフ・ティンバー造り、丸味を帯びた茅葺き屋根は駱駝の背中を偲ばせるものがある。庭は狭いが、昔ながらの草花が植ゑられてあり、中にも五月咲き亂れるローズマリーは、狂ふたオフィリヤの「*that's for remem-brance*」といふ言葉を想ひ出させる。

彼の隣人は鍛冶屋であつたが、沙翁はこれを「*ジョン王*」の一場面に「ハンマーを握つたまま口をあんぐりと開いて、仕立屋さんの話に聞き惚れてゐる鍛冶屋さん」と描寫してゐる。その仕立屋さんも近所のおぢさんであつたのだ。將來作家たるウイリヤムに、これらの人達のお話が大いに影響を及ぼしたことは疑を容れないところであらう。彼の劇に對する興味も、この時代に根ざしたものらしい。彼が十二歳の頃、レスター伯がエリザベス女王をストラトフ・

から程遠からぬケニルウァースのお城に迎へて、饗宴を張つた。その時城外で行はれたページェントを彼が見物したのも、その一因であると言はれてゐる。  
年に一度の行事として受難劇を演ずる有名な素人芝居を、彼がカヴェントリーまで見物に出掛けたこともあつたらしく、その印象は感受性の強い少年の胸に、深く刻まれたことでもあらう。

沙翁の描寫する花卉草木は、殆どいつもエイヴァン川畔の野邊を飾るものであつた。オフィリヤが狂ふ足を踏み外して落ちる川の面には、柳が裏白の葉をさし延べてゐる。沙翁は多分エイヴァン川岸に並ぶ柳を回想したのに違ひない。

「雨の降り月卯月でござる

卯月が飾る岸邊の花は

百合のお花よ、芍薬よ」

「ジュノの眼もヴィナスの吐息も

如何で及ぶべき

色香床しきすみれぐさ」

「日まはりは固う閉ぢたる金色の

眼をそつと開きつゝ」

などは、花に關する美句に富むといふ「シンペリン」「冬物語」、「嵐」などの、沙翁の晩作に見るものである。彼の作から思ひ合せると、このエイヴァン川岸には、春から夏へかけて咲く花が多いらしく、秋の花はサフラン以外には目立たぬらしい。

沙翁が埋葬されてゐる教會は「ホーリートリニティ寺院」である。

エイヴァンの川岸に沿うて聳ゆるこの教會の塔には、八つの鐘が納められ、その鐘の大役といふのは、毎年四月廿三日沙翁誕生日に一齊に鳴り渡ることである。エイヴァンの川浪は教會の

石垣に絶えず嘯いて、隣接する墓地には、エルムの優しい枝が川風に動き、小鳥の翼に揺られてゐる。

ライムの並木を進んで教會の北入口に至れば、朽ちた樫の大門があつて、魔のさした佛様のやうな顔が、青銅の環を叩へてゐる。これは「サンクチュアリー・ノックア」といふて、お尋ね者が、この環で戸をバタバタ叩いて、坊さん呼び起し、身を匿つて貰ふためなのである。かうすれば、三十五日間は身の安全が保證されたのだと言ふ。さて、こゝから聖堂の中に静かに進めば、此處は薄暗く、静肅で、沙翁の記念像も無言のまゝちつと動かない。この像の沙翁は、廣額、禿げ頭、ちよんぼり顎髯の何處かにここにこしたいゝ小父さんである。製作費は沙翁の娘が出してゐるからには、實物に似通つたか、或はやゝ以上のものなのだらう。白い折襟に胸ボタンの多い赤い着物、右手に羽ペン、左手は紙の上に置いてゐる。この像の下に、「骨に觸つてくれるな」といふ銘を刻んだ石の墓標があり、その下に詩人が眠つてゐるのである。この銘の故に、詩人の遺骸はウエストミンスター寺院に移されなかつたのだと言ふ。

ガラス箱に大切に保管された教會の黄ばんだ過去帳には、沙翁の受洗日と埋葬日の記録がラ

テン語で記されてゐる。即ち、一五六四年四月廿六日、一六一六年四月廿五日。

沙翁が受洗の時用ひたといふ聖水器が飾つてあるが、形は八角で、それに四つ葉模様が美事に彫られてゐる。憾むらくは破損して、最早修繕ができない。

今更ながら沙翁はイギリスの誇りだ。「印度を失つても、沙翁を失つてはならない」とカーライルは叫んださうだ。ロンドンの霧が次第に薄れて行く、成程霧も惜しい。しかし霧なんか失くなつてもよいではないか。イギリスは沙翁さへ大切に保存すればイギリスの光榮は永遠に輝くことであらう。その築き上げた英帝國は喪失性を具有してゐるであらうが、シ・クスピヤーだけは、誰からも奪ひ取られるものではない。地と共に窮りないこの國寶をもつイギリスは、「彌榮」を叫んで、餘り愁かかないことだ。(昭和十四・七)

## 忘れ物の天才

初冬の午後四時半、ロンドンのウオタル・ステーションは、もう電燈の光が足許に必要であつた。旅客と見送人とポーターとは、それぞれの異つた動作で、長いプラットフォームを埋めてゐた。殊に印象に残つてゐるのは、赤帽ではなく黒帽のポーターの、三つも四つも鞆を抱へた姿態、宛然重心を失ひかけた積木細工の玩具に似たその姿である。

日支事變を背景に、約一ヶ月半をロンドンに過した自分の出立を、ステーションまで見送つてくれた日英人の中に、英人S氏がゐた。約三十年以前に、彼は日本に住んだこともある。今でも商賣上、日支と關係が深い。

「イギリスは百年の努力で、支那との商業關係を築き上げた。その後屢々英國は支那政府の抗英政策に直面したが、これに對して、いつも武力を以て制して來た。現在の日支事變は、英支關

係の過去の歴史の反覆である」と言ふのが、S氏の日支事變觀である。彼は靜かな調子で、私に話した。イギリスでは、ある一部の人達は、日英同盟復活の必要を痛感してゐます。だからイギリスの對日輿論が全面的に非常に悪いなどは、歸朝後言はないで頂きたい。先日重光大使の歡迎會を自宅で催したくて、諸名士に招待狀を發したところ、全部快諾の即答でした。これもイギリス人の對日感情の一表現です。」

日英同盟時代の對日感情をそのまま持ちつゝあるこのイギリスの老紳士との握手を、ロンドンに於ける英人との最後の握手として、私はブルマン車上の人となつた。

コンバートメントの中には、只一人のラテン系の中老紳士が、窓ガラス越しに停車場の群集を凝視してゐたが、汽車が停車場を離れ、車窓に映るものが田舎景色の連鎖となると、件の紳士は、私に向つて話しかけた。

「長い間ロンドンにおゐてでしたか？」

「約一ヶ月半」

「さうですか私は六ヶ年」



彼は南米のある國の駐英外交官で、その令妹はその國の大統領夫人、彼女が今夜サザンブトを出帆するノルマンディ號に乗つてゐるので、これから會ひにゆく途中だと言ふ。

「僕も北米や歐羅巴には度々行きましたが、南米はまだです。一遍行きたいですけどね」

「いや、是非一度は南米の地をお踏みなさい。新興の天地です。しかし私の國の文化は實に古い。エジプト文化と共通點があると言はれてます。私の國の棉やコーヒーは日本に大分輸出されてます。」彼の瞳は輝いた。

「確か一八九八年頃、第一回の日本移民が貴下の國に渡航したと記憶しますが、現在日本の移民は成功してますか、どうでせう？」

「大成功ですよ。日本人は伶俐で、勤勉で、青雲の志に燃えてゐます。一エーカーの土地を握つた者は、百エーカーの土地を目的に鋤を振つてゐます。私は、國では、つと日本人の召使を雇つてますが、その中の一人に非常に勤勉のがゐましたが、暫くして暇を取りました。そして七、八年後の或る日、私が汽車の特等室に坐つてゐると、一人の日本紳士が、私の前に腰を掛けました。さうして私をまじまじと見てゐたが、立上つて「貴下はAさんでせう」と言つて、怪訝

な顔付の私に、私はK、昔貴下の御家の召使でした。當時から志を抱いてをりましたが、奮闘努力の結果、今日は牧場の主人となりました。貴下は私に取つては恩人です」といふ説明です。

それから又年を経て或る時、オリンピック大會の時、日本代表K博士に會ひました。K博士は「私に弟がありました、どうも手におへぬ人間で、たうとう貴下の國に流浪してゆきました。しかし南米の太陽は彼に新しい刺戟を射し込んだらしく、その後彼は改心、大いに奮闘して今は牧場の主人になりました。」詳しく聞いてゐる中に、それが私の家の召使Kさんだつたと判り、K博士と私とは握手のやり直しをしたのでした。實際、世の中は廣いやうで狭いもんですね。あのK博士も亡くなりましたか……嘉納さんも亡くなつたさうですね……この間新大使重光さんに會ひました。脚が悪いやうですね」

「上海事變當時の遭難の跡なんですよ」

「今度の上海事變ですか？」

「いや滿洲事變當時の」

「あゝさうですか。非常に伶俐な人と思ひましたが、それでは英雄でもあるんですね。時にどうですイギリスの滞在は、面白かつたですか？」

「氣に入りましたね、いつ來ても、イギリス人は沈黙考の裡に、營々として、己れの仕事を遂行してゐる點がいゝですね！」

「なる程沈黙考ね、長く生活するには、イギリスは氣が落ち着いてよろしい。しかしどんないいことも 續けば倦きる、華かな巴里の灯も、偶には戀しからうちやありませんか。毒だつて、偶には藥です。だからイギリス人は「巴里、巴里」と騒いでまさあ。あんな修道士みたいなむつり屋の英人が、ドーヴァー海峡を渡ると大はしやぎにはしやぎ出します。赤い葡萄酒の色を見ると、血走るんでせう。あんなところを見ると、イギリス人の偽善者奴と言つてやりたくありませんね」

「ウ・スキーを飲むとあんなに生眞面目になつてしまふんでせう」

「ロンドンの紛失品扱所を御覽でしたか？ まるで百貨問屋の光景ですよ。傘あり、トランクあり、コートあり、電氣スタンドあり、傘はまあ忘れろとして、電氣スタンドなんか傑作です

ね。兎に角イギリス人は忘れ物の天才ですよ」

「子供の忘れ物なんてのはありませんか？」

「いやまだそこまではね。然し進取の氣に富むイギリス人のことです。忘れ物も早晚子供にまで進展するでせう、はゝゝ」

「時にイタリヤはどなたでせうな、今度は僕たうとう見られませんでした」

「行らしたのは何時頃です」

「十三、四年前ですな」

「いや、その時と今とは大分違つてゐますぞ。兎に角ムッソリニは偉いですよ。その一例がイタリヤ船。昔は不潔で乗れたもんでありませんでした。今は實に清潔なもんです。この變化が只一人の男の力に據るんだと思へば、感心の外ありません」

「ジウ問題で、獨逸も大分八益しくなりましたな」

「獨逸では、ジウと獨逸人との結婚も仲々許されないうさうですね」

「えゝ、この間、獨逸で往年物故した、ある世界的大法律家の息子に會ひました。その息子さん

の妻君はジウ貴族なんですが、彼等の其娘さん、故博士には孫娘さんが、純獨逸人と結婚をしたいが、これは獨逸政府の特許なき限り、法律上不可能といふんです」

「馬鹿に八釜しいんだな、はゝゝ」

「これを聞いたアメリカの法律の大家連が、この故博士の貢献は、獨逸法學の世界的聲價を高からしめたことを證明して、結婚の特許が與へられるやうにと、努力しました」

「それで成功しましたかい？」

「いや、特許は委員會で否決されました。ところがヒトラアの信任篤い官吏の一人に、故博士の門弟があり、遂にヒトラア總統を説得して、この結婚はめでたしめでたしとなりました」

「職業上でも迫害はひどいでせうな！」

「さうね。ジウでも、裁判官、大學教授と言つた官吏は辭職しても恩給が獨逸人同様で、永く勤めた人は俸給の八割にもなります。だからジウ排斥も、彼等には、さう經濟上の痛手ではありません。困るのは、辯護士、醫者、藝術家などの自由業者と商人階級でせう」

「そりや商人は困りませうな」

「ジウ商人の店の窓ガラスにはちやんと白色で店名が記されて、鬼は内とばかり警戒されてるんです」

「さぞ反抗心に燃えてませうね」

「ところが、彼等はちつと堪へてます」

「劍に手をかけながらですかい？」

「いやいや自分達の歴史的の運命と觀念してゝす」

「ちや、無抵抗主義ですかい、木枯に吹き飛ばされて行く枯葉のやうに……」

「一體こんなにジウが迫害される原因はなんだと、貴下はお考へです」

「さうですな、まあ、彼等の先天的優秀性が祟つてませうな。兎に角、伶俐で、天才的な民族ですからね、何をしても成功しますわい。従つて、職業戦線に立てば、彼等は優勝者、獨逸人は落伍者」

「つまり、ヒトラアはユダヤ人を追つて、獨逸人の失業を救済したといふわけなんですな」

「それから、あのシャイロックそのまゝの性格、あの殘忍さ、拜金熱は、修養と教育位では根

こそぎにはされせんわい」

「矢張獅子は獅子、いくら撫でも猫にはならないといふところでせうね」

「防共政策の上からも、ジウの追放は必要なんですね。つまり、ロシアの共産黨の巨頭連にはジウが多いのですから。」

「ヒトラアのこのジウに對する處置を、どうお考へです」

「一寸やり過ぎですわい。人間は餘り偉くなると、周圍の人に崇め奉られてしまつて、つい自分のしてゐることが分らなくなるんですね」

「ナポレオンもやり過ぎ、ヒトラアも亦やり過ぎですか」

二人は暫く無言のまゝ窓外を覗いた。サザンプトンの町の灯が美しい。例の紳士は自分の名刺を私に渡して、彼の國から近く日本に派遣される經濟使節の團長は、自分の友人である。もし會つたら、この名刺を見せろ、屹度悦ぶに違ひないと言つた。そして彼は凝然私の顔を見詰めたまゝ、ラテン系の温い血の通ふ手で、私の手を握つた。これは、おそろくわれわれ二人の最後の握手であらう。只彼の國と我國との握手は、益々固くならむとつゝある。(昭和十四・六)

## 人道主義者の東亞觀

人道主義者又は國際主義者とも特徴付けらるべきある米人が、ある場所に於てその同國人を聽衆とし「私の東亞印象」と題して話をした。私はその話の内容を、何らかの形で、我國の人に紹介することを、その米人に約束して置いたので、今此處にその話の要點を書きつけて見たいと思ふ。

彼は東亞の印象に入るに先立つて、まづ彼自身の閱歷と彼自らの一般的立場とを説明する。

「過去三十年間私は世界各國の學生と親しく接することを、私の仕事としてゐた。そして又私は米國內は勿論のこと、世界の國々を廣く旅する機會に恵まれたのであつた。東洋には「百聞、一見に若かず」と言ふ諺があるが、これはまことにその通りであると私は思ふ。他人の立場をほんとうによく理解するためには、その者に直かに會つて、面と向つて、語り合ふことが一番

いゝに違ひない。そして諸國家間及び諸民族間のよき了解のためにも、同じこの原理が作用するものであると思ふ。萬巻の書を読むよりも、むしろ實際行つて、自ら見聞することによつて自分達とは異つた文化をもつ人達が如何に考へ、如何に生活してゐるか、成程と領けるやうになるのである。私は世界を自分の家だと考へてゐるものである。私はすべての國を愛する。私はどの國に對しても、少しも何等の偏見をもたない。

「私は、私の生れ故郷アメリカを愛する。尤も私は自ら進んで、私の母國を選択したわけではないから、これに就いて、私自身が特にこれについて誇をもつ理由は少しもない。私は生れる前「私は此處に住まう、彼處に住まう」と決めたのではないのだ。現代に於ける種々な問題と混亂との一つの理由は、特定の國、特定の文化圏に生れた人々が、その眼界とその思想とを遠隔の地に向け得ないことにあるのだと自分は考へてゐる。これら遠隔の地も、彼等の父祖の時代に於ける近接の場所以上に、實はずつと近いのだ。ジョージ・ワシントンが第一次大統領就任式に臨むため、マウント・ヴァーノンから紐育に赴くために七日を費してゐる。ところが今では、この旅は電車で三時間五十分しかかからないで行けるのである。科學と發明とのために、

世界は縮少した。それは恰も、その大通りに各國民の住む一つの村落のやうなものとなつたのだ。もはや各國民が相互に、了解し得ない筈はないのだ。ところが困つたことは、各國民が壁や垣根を作つて、「立入るべからず」と言ふ態度を示すことである。他人の「立入を禁止する」その同じ壁や垣根が、自分をも「閉ぢ込める」ことになるのであることを彼等が十分に意識しないことである。發明と發見とは、我々がお互に知り合ひになる暇がない位の速力で、我々を近接させてしまつたのである。物質的變化は、人間相互の間の調和を齎すことに向けられる我がの思想が、これに追いついて行けない位の速力で進行してしまつたのである。

「私は平和主義者ぢやない。物の分る人間なら、法律の背後には、力がなければならぬことを誰もよく理解する筈である。赤信號が現れる際に、何故君は自動車を止めねばならぬと考へるのか。これはもし止めないと、「法律」が召喚狀を發し、必要な場合には、君を拘留するでらうことを、君が意識するからではないのか。それは、「合理化された」力である。これに反して、戰爭は「合理化されない」力であるのだ。戰爭が今でも世界に流行してゐるのは、一部の人の考へてゐるやうに、諸國民がお互に憎み合ふ、例へば、佛人と獨人と、日本人と支那人と

が憎み合ふてゐるがためではない。それはわが世界「村」にストップ・ライト制が設けられてゐないためである。戦争があるわけは、各國民が近代的な進歩に、自國の對内生活を調整することに忙しすぎて、未だその對外生活について、新しい工夫をする暇がないからなのである。戦争が無駄であることは、戦争が解決する以上のいろいろの問題を、新に惹起するものであることは、今日では誰にもよく分つてゐる。西部戦線に對峙してゐる歐洲の國民にも、それはよく分つてゐるのだ。私は東亞でも、矢張さうだと信じてゐる。かゝる故に、平和はもう直ぐ手近に來てゐるのかも知れないとも感ぜられる。蓋し、自己保存は人類の最も強い本能なのだ。人類が今將に絶壁の淵に面接してゐると言ふことを人類が意識するなら——そして現在では過去に見られなかつた程、人類はこれを強く意識してゐるのだ——人類は其處から踵を廻らすべきある方法を案出するに違ひないからである。

「以上は東亞に於ける私の觀察を語るがための、豫備的な前置きである。私は何人に對しても「親とか反」とかいふ立場にゐない。私は、すべての人に親しきをもつ者である。蓋し私はすべての人間が運命を共にしてゐると思ふからである。我々はいづれも皆、個人たると國民たる

とを問はず、均しく、同じものを畢竟求めてゐるのだ。然らばその同じものとは何か。「生命、自由、幸福の追求」これである。仕事と、ある程度の安定と、それから生活の喜びとがこれであると私は考へてゐる。

かうした戦争と平和とに就いての彼自らの感想を率直に述べた後、彼はおもむろに、東亞の旅行印象に就いて語る——

「八月初旬、私は妻と共に横濱に上陸した。そして東京に設立さるべきインタナシ・ナル・ハウスの計畫に就いて相談するために東京に行つた。この計畫は一九三七年の夏着手されたのであるが、北支に於ける事變勃發の爲に、暫くの間これを高閣に束ねねばならぬことになつた。故國の私の友人達の多くは、戦争に従事してゐる國民の間に、インタナシ・ナル・ハウスのやうな平和的なものを開かうとするのかと吃驚して、私が氣が少し變になつたんではないかと心配したことであつた。數回極東に行つたことのある私は、日支衝突の背後にあるいろいろの問題を相

當よく理解してゐると考へてゐたが、然し私はもう一遍往つて、自分で親しくこれを觀察したいと思つたのだ。そしてインタナショナル・ハウスに關する計畫に就いては、私は、友人達に向つて、「もしも平和に際して戦争の準備をすることが論理的であるなら、その逆も亦眞である。戦争に際しては、平和の準備をすべきだ」と答へたことであつた。私達が日本に到着してみると、自分達の會はうとしたすべての人は、避暑地に散在してゐた。そこで、私達は直ちに滿洲支那及び朝鮮に旅立たうと思つた。私達はアメリカのパスポートを持つてゐたのではあつたが、かうした旅行は果して日本政府當局の是認するところかどうかを問ひ糺しに、外務省に出かけた。ところが外務次官は、偶然にも私の舊友澤田廉三氏であつた。澤田氏は私達の旅行を是認したばかりでなく、是非行くやうにと極力勸告した。かくして私達は、數週間日本の地を去ることとなつた。船中は、大西洋を横切る航海と、少しも變りのないものであつた。私達の汽車旅行に費した時間は、ノヴァ・スコシアからニュー・オールレアンスを経て、ロス・アンジェルズに行く汽車の旅と同じであつた。諸君等は「東亞」は地圖の一點に過ぎないと考へられるかも知れないが、それは合衆國の面積に均しい地域なのである。

「上海にはいつも、私の感情を動かすものがある。今回はこれを冷靜に、客觀的に觀察しようとして努力した。私は戦争の爲に荒廢した地域を見た。しかしそれにもまして、共同租界に追ひ込まれて來た百萬の避難民を目撃した。更に又其處では、到るところで、貧困者の群を目撃した。特に河川の附近には、船の入港毎に、船から棄てられる廢棄物を、飢ゑた犬の如くに奪ひあつてゐる極貧者を目撃したのである。しかるに、この大都會の海岸通りに、何を私が見たか？ 大伽藍か？ 美しい音楽を樂しみる大公堂か？ 優れた支那藝術品に満ちた博物館か？ 或は大學か？、いやいやそれらの何物も其處には見出されぬのである。海岸通りには、美しい建物が數多く建つてはゐる。然しそれらは、財界の王者の城壘なのである。それは西洋文明が支那から「奪ひ去る」ものを表象するものであつて、支那に對し「興へた」ものを表象するのではないのだ。しかし上海に於て私に興へたる最も強い印象は支那の前庭に碇泊したあの列強の軍艦である。それらは内部的壓力の醸成する事態に對して、固い蓋を冠せる爲に、其處にゐるのである。この光景は私に對して羞恥の念を起させた。それから南京、青島、天津、北京へと支那國內を旅行してゐる際、上海の光景は、いつも私の念頭を去らなかつた。それは將に終ら

むとする時代を、描き出してゐるのである。列強の考へ方は、過去に於ては兎に角、現在では支那の改善の方式とはなり得ないのである。

「私は再度滿洲を訪ねることができたことを喜んだ。十一年前、私は上海から安東、大連から奉天と新京を経て、ハルビンに至るこの同じ地域を旅行したのであつた。北米合衆國の殆ど六分の一に均しいこの地域に於て、過去十年間の變化は、殆ど信すべからざるものがあつた。最初の訪問の際には、滿洲の田舎は、大部分高低のある未開拓の草原といふ印象を私に與へた。ところが今では到るところに、作物が栽培されてゐるのではないか。都市の發達は、それにも増して一層顯著である。首都新京は、十年間に、人口十萬以下から五十萬以上の都會に擴大してゐる。それは、無軌道に發達した田舎町ではなく、最近代式の一流都市である。それは花と灌木とに依つて裝飾された宏大なサークルから派生する廣い街路をもつ新ワシントンとも言ふべき趣きである。官廳の建物は、世界到るところの官廳建物に匹敵することができる。外觀は、それ程豪奢ではないが、内部は頗る便利にできてゐる。かうした擴大は、鋪裝、照明、給水、排水、それから運送、學校、病院、ホテル、百貨店等々いふいろいろのエンジニアリングの

問題の解決を要求したのだ。奉天もこれと均しい發達を見た。それは以前よりも、産業都市としての姿を呈するやうになつた。工場と、鐵道との網は、將にシカゴを想起させるものがある。私達は又、滿洲國のピッツバークともいふべき撫順を訪問した。其處には、世界最大の野天堀の炭礦が在る。その開發は、パナマ運河の開發をも凌駕するものである。この炭坑を上から覗き込むと、直ちにコロラードのグランドキャニオンが聯想される。撫順には又大きな石油液化装置と、粉末石炭を燃料として利用する宏大な電力装置がある。吉林に近い松花江には、堰堤が作られてをり、それは殆どローズヴェルト・ダム貯水池と同等な貯水池を作り出すことになるであらう。そしてそれは××萬キロワットの電力を供給し、又コネティカット州に均しい地域を灌漑することゝなるだらう。この新國家滿洲國全體を通じて、私は到るところ、活潑な動きを強く印象づけられたのである。

「朝鮮を横切る途上、私共は京城に數日滞在した私の印象は滿洲國に於けると同様なものであつて、只程度に於て、差異があるだけだ。蓋し其處では、新時代に入つてから、既に三十年を経過してゐるからである。其處では小學校、中學校、國立大學を通じて、文化的な影響が普ね



く及んでをり、又その博物館、宮殿等においては朝鮮の民族的誇が高調され、又朝鮮古代音楽への興味の復活さへも見られるのである。

かうした観察から、氏は次のやうな結論を引き出す——「東亞の鳥瞰圖は、恰も歴史書を辿るやうである。支那は年代的に最も現代からかけ離れた、中世期に位する。滿洲國はアメリカ式な「西部開拓」を反映してゐる。朝鮮は、中期ヴィクトリア王朝期に位する。そして日本は最先端を行く、テンポの迅速なモダニズムの渦巻の中にある。

「然らば時間と、空間とに於けるこれらの相違を、どうして調和し得るであらうか、諸君が私に、これに對する回答を與へてくれるならば、私は諸君のために、ヨーロッパの謎を解いてあげることが出来るであらう。然し私は私の世界旅行及び各國民との接觸に顧みて、一つの私見を此處に提出したい。誰が侵略者かなと言ふことを詮議だてすることは、全然無益な業である。世界劇に於ける眞の悪漢は、實は臺所に坐つて、煮立つてゐる鐵瓶を見て蒸氣力を見出した男

なのだ。この發見から一聯の結果が生れ出た。蒸氣機關、機械、鐵道、汽船、電氣、銅鐵、セメント、電話、無電、シネマ、自動車、飛行機等々。アメリカ共和國の建國以降、科學はそれ以前の總ての世紀を合算したよりも、より大きな變化を人間の生活と思想とに齎したのだ。歴史のこの「最後の瞬間」に於けるこれら物質的變化は、われわれがそれらを抑制するがための思想を追ひ越して、どんどん進展した。産業化のために生じた資源及び市場への狂氣染みた追求のために、我々は我々の生活及び幸福の本質をなすべき基本的な人權の原理を蹂躪した。我々は残らず皆過誤を犯したのであるから、一諸にその罪を悔いて、物質的成功のために精神的考慮を捨てなかつた時點まで、引退らねばならないのだ。尤も人間は文化的の貢獻を享受すると均しく、物質的貢獻をも享受すべきであることは勿論である。問題は、指導者の問題、眞の國際正義に基いた「新道徳」の問題である。病める社會に、舊式な藥品を與へても、病人は治りつこない。新しい酒を古い革囊に入れることを、我々は廢めなければならぬのだ。

「太平洋に面接する新しい國民である北米合衆國と日本とが、新しい治療法の應用に就いて相提携するならば、兩國民は、世界の諸國民を荒野から「新しい世界」に導いてゆくことができ

るであらう。

この話の主は、最早讀者の中には、あゝあの男かとお分りの方もあらうが、それは去年來朝した「インタナショナル・ハウスの父」と呼ばれるハリー・エドマンズ君であることを此處に明して筆を擱かう。(昭和十五・四)

高柳賢三氏は明治廿年五月埼玉縣熊谷に生れ、一高を経て、大正元年東大法學部法律學科卒業。大正二年十一月同大學法科大學助教に任ぜられ、同十年教授拜命、英吉利法講座を擔任今日に至る。その間大正四年から同九年まで英米法律研究のため海外留學を命ぜられ、米、英、佛、獨、伊にて研究。尙昭和九年から同十五年まで東京帝大圖書館長をされた。

教授は多年太平洋問題調査會理事として活躍され、ホノルル、京都、上海、バンフ、ヨセミテに開かれた第一回乃至第六回太平洋會議に出席された。又、昭和十三年八月から十二月まで歐米を巡遊し、ブラツセルスの著作權會議に日本側委員として出席、十四年には日米學生會議出席の學生四十八名を引率して渡米された。以上の外遊中での感想隨筆集が本書である。

趣味、旅行。著書、英米法講義(有斐閣)その他英米法に關する學術論文多數。新法學の基調(岩波書店)現代法律思想の研究(改造社)法律哲學(岩波書店)獨裁制と法律思想(河出書房)

三つ會の話

定價 一圓七拾錢

昭和十六年三月二十八日印刷  
昭和十六年三月二十一日發行

著者 高柳賢三

發行者 江原謙三

印刷者 渡邊丑之助

印刷所 東京市芝區愛宕町二ノ十四  
愛宕印刷株式會社

發行所















東京市麴町區內幸町二ノ一

文藝春秋社

振替東京一七六〇三番  
電話銀座五六八一―五番

911  
207

16年 5月 23日 VIII-8

閱覽濟

終

文

文藝春秋社